
ネギま！ チートと女神の世界崩壊

無限の剣製作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ チートと女神の世界崩壊

【Nコード】

N8607T

【作者名】

無限の剣製作者

【あらすじ】

トラックに挽かれたわけでも病気で死んだわけでもなく普通に満足して死んだ主人公が女神に好かれてネギまの世界に転生した。有り得ないチート能力を二つも携えて……正義の魔法使い・ネギアンチ作品です。その所お気をつけ下さい。

ブローグのようなもの（前書き）

原作や二次小説をよんでいて書きたいから書いてみました。
後悔も反省もしていません（おい

プロローグのようなもの

「へ？ここどこ？」

見渡す限り緑の草原。その中に、俺は一人で立っていた。

「一人じゃないよ」

「うおっ！心を読まれた！！？」

心を読まれたことにも驚きながら振り向くとそこには有り得ない位の美少女が座っていた。

金髪碧眼、髪の長さは肩ごし位まである、まるで現実世界にはいない位の。

そして、スカート姿で体育座りは止めて下さい。確かに、白は似合っていると思いますが。

「うん。だってここ現実世界じゃないし私神だもん」

……へ？

「どういうことだ？」

「ちよつと。その前に貴方私のこと馬鹿だと思ったでしょう」「当たり前だろ」

初っ端から神宣言だぜ？当たり前だろ。

「……まあいいわ。で、貴方転生することになったから。良かったわね。一億五千六百八十万四千分の一の確率よ」

「まて。その前に俺は死んだのか？」

「ええ。大層幸せそうに死んでいたわよ」

「まて。そんな記憶は」

そう言われて、俺は思い出した。

前世で、七十七歳まで生きたことを。

「そういうこと わかってくれたかしら？」

「ああ。痛いほどよくわかったぜこんちくしょう」

過去に、俺は危ない橋を渡りながらも会社を設立して巨額の富を築

き上げた。

そして、引退してオタクの道へと目覚め、死ぬ間際に『転生したい』だのほざいた記憶がある。

……ってか、遺言が『転生したい』って。

「理解できたかしら？」

「ああ。俺が馬鹿だったということもな」

座り込んで頭を抱える。自分の馬鹿さ加減に嫌気がさしてきた。

「で、お前さんは俺を転生させてくれると」

「ええ。色々な能力を加えてね。ただし。一つだけ条件があるわ」

「条件？」

「ええ！お願い！私を連れてって！」

「……はい？」

一瞬、ザ・ワールドが発動したと思ったのは俺だけじゃないと思う。いや、俺意外いないんだから実質俺だけか。

「私も外の世界を歩き回ってみたいの！御願い！」

「なる程。……本音は？」

それを聞くと「うつ」と言って顔を背ける女神様。いや、マジで可愛いので止めて下さい。

「実は……あなたのことが好きになっちゃったの」

「……はい？」

いや、本気でわからない。

確かに俺はそこそこ見た目やスタイルはいいと思う。過去に、ストーカーにつきまとわれたこともある。

が、俺のことを本気で好きになっちゃった人なんていない。

その理由は

「虐められたいのかな？」

そう。俺、極度のDSなんです。

ある程度までは抑えがきくんだけどね……一定以上になると（自主規制）や（自主規制）、その果てには（自主規制）なことまでしちゃうのです。

「貴方の人生を見てて、ついゾクゾクきちゃって……」

まずい。こいつ、極度のDMだ。

……あれ？ 案外俺にあってる？

「で、いい？」

「ああ、別に構わん」

そう言つてやると、女神様はやったと言つて踊り回る。いや、色々
と邪魔なので止めて下さい。

「で、転生するのはネギまの世界なんだけど」

「待て。なんでスルーする」

「だって、つい……ねえ」

女神様の言葉は無視しておく。

しかし、ネギまの世界ねえ……

俺、あの農産物と自称正義の味方（笑）は嫌いなんだよねー。

正義の味方語るんならあの赤い弓兵くらいやってから語れつてもんだ。

農産物は……まあ、ねえ。もう少し、秘匿の二文字を覚えたらマシになるんだけどね……

「で、だ。付加する能力は、これで決めよう！」

すると、女神様はどこからかトランプを取り出す。

……おかしい。ポケットなんてついていないはずなのに。一体どこから出したんだ！？

「魔法の谷間」

ああ、はい。確かにその胸は凶器ですね。

「ここから、君には二枚のカードを引いてもらう。そのカードには

あらかじめ決まった能力があり、その能力が与えられるってわけよ
!!」

「その中には……無限の剣製とか直死の魔眼とかあるのか?」

「あるけど……あまりお勧めはしないよ?」

「どうしてだ」

「無限の剣製なら魂が英霊工ミヤに引つ張られるし、直死の魔眼だと死に近づくからね」

なる程。確かにその考えは一理ある。

「で、早く引いてー」

「わかったよ。……これだ!」

適当に二枚のカードを引く。すると、女神様が有り得ない物を見たような目で俺を見る。

「……俺、なんかしました?」

「いや、貴方ってかなり幸運ね。多分luckがAはあるわ」

「まあ、昔から運は良かったからな」

事実、昔銃を持った敵から逃げた時、毎回相手が弾を詰まらせたのだ。

いや、にしてもluckがAもあるとは。これは能力に期待できるな。

「貴方が引いたカードはスペードのエースとジョーカー。よって、貴方に与えられる能力は」

「すげえ。まさかそんな53分の2でそんないいカードを引けるとは。ポーカーならいきなりエースのワンペアだぞ?」

「『才能を操る程度の能力』と……まさかこれが与えられるとはね」
「どうしたのか?」

「なんでもないわ。後一つは、『概念を操る程度の能力』よ」

……Why?

「今から説明するわ。まず、『才能を操る程度の能力』はそのまんまよ。自分、相手の才能を自由に操ることができるわ。例えば、貴方は転生したら自分と触った相手の色々な才能を変更できるわ。そ

れは、魔法、科学、文芸からお料理まで……ね」

「……いきなりチートだ……」

有り得ない。最強じゃないか、俺。

「じゃ、

もう一つの能力の説明をするわね。『概念を操る程度の能力』は、

概念を付与したり、抹消したりする能力よ。例えば……敵の心臓か

ら『鼓動する』という概念を抹消したり、『雷の暴風から』ヨウイス・テンベスター・フルグリエンス『殺傷力』

という概念を抹消したり、はたまた木の枝に『槍』という概念と『

攻撃する前に当たった』という概念を付与したり、ね」

「なんだそりゃ……」

なんか、もういい加減驚くのにも慣れてきたような気が。

「あ、後貴方だけ詠唱はなくていいわよ？」

「?どういう……」

俺の言葉は、途中で遮られた。

その理由は、女神様が俺の唇に彼女の唇をくっつけてきたからだ。

無論、口の中は俺が支配してやったが。

「（ぷはあっ）うん、やっぱりいいわね……この虐められる感じ」

「これからはいきなりは止めてくれよ……」

「はいはい。あと、さっきのキスで貴方が主の仮契約を結んだから。

だから、精霊が勝手に自分から怯えて従ってくれるはずよ」

……精霊よ、すまん。

「じゃ、いただきますか」

「待て。どう行くん」

その言葉を言い終わる前に、今まで立っていた場所が消えた。

「ええええええええ!？」

「さ、れつつらごー」

それが、俺 ヤヨイ・ミオ 弥生漣と、後でアテナとか名乗った女神のネギまの

世界への出発だった。

プロローグのようなもの（後書き）

ヒロインは、一応この女神様になりますが、他にもヒロイン候補はいます。

出来れば感想をいただけると嬉しいですね。　　というか下さい。待ってます。

第1話 さあまずは修行を始めましょう。(前書き)

実はもう一話あったりして。

ではお楽しみいただけたら、と。

第1話 さあまずは修行を始めましょう。

「……で、ここはどこ？」

気がついたら俺と女神様は森の中にいた。

……っていうか、これって絶対に

「……アマゾン？」

「おしいつ。後少しって所で、七十点！」

横を見ると、もの凄い綺麗な笑顔でこちらを向いてくる女神様。

いや、もの凄く綺麗なんですが。

「で。まずは挨拶しよ。私はアテナ。一応女神だけど様はつけなくていいよ。むしろアーたんとか読んでくれちゃってオッケー！」

とかなんとか、もの凄く早口で言ってくれる女神様。

……って。

「アテナ……あの女神……？」

「そうなのよ。あの王子は私よりもアフロディーテのほうが綺麗だとかぬかしやがったけど、私だってスタイルには少しは自信があるのよ？」

いや、少しどころじゃない。綺麗すぎて、見てるだけで目が壊れそうだ。

「さ、次は貴方の名前。教えて？私の愛しい人」

そう言つて、上目使いでこちらを向いてくるアテナさん。

……ヤバイ。堕ちるのも時間の問題かも。

「俺の名前は、弥生漣。昔は会社の社長をやってた。……って、お前俺の名前知らないのか？」

「うん。だって、（自主規制）シーンしか知らないし、その時に漣は相手に『ご主人様』としか呼ばせてなかったし」

……なる程。悪いのはそんな変な所しか見てなかったコイツか。

「……で、ここは？」

「こつちに来る前に私がこの世界につくった『地図には存在しない島』。半径25キロメートルの島よ。この島自体が最高峰の霊脈を通っていて、その魔力を応用して全体に認識阻害の結界を張っているわ」

「なる程。だから『地図には存在しない島』なんだな」

見つけられなければ、地図には乗らない。しかし、この島は実際には存在する。その矛盾を表したい名前だと思う。

「後、この島は太平洋の真ん中にあるわ。そして、はいこれ」

「へ？」

アテナから渡されたのはただのピッセル。

「これは？」

「いいからちかくの層を掘ってみなさい」

言われるがままに近くの層になっている所を掘ると、何故かそこから黄金が出てきた。

「……はい？」

「この島はかなり異常でね……作った私も驚いたんだけど、有名な鉱石の鉱床があるのよ。金、白金、ニッケル……他にも様々な鉱石があるわ。後、生態系も少し変わっててね……お、来た来た」

変な足音のする方を向くと、そこには何故かガララワニ（……）がいた。

「……へっ？」

「いやー、昔トリコにはまっちゃってね。適当に弄くったらこうなつた。ごめんね」

「許せるかあつー!!」

一瞬でガララワニの方を向き、

「『燃える天空』!!」

とりあえず出てきた強力呪文を放とうとする。

しかし、『燃える天空』は、

「……嘘だろ……？」

当たったが、まるできいていないかのようにガララワニは立ってい

た。

「当たり前じゃない。いくら才能があっても、しつかりと原理が理解出来てない状態で完全に魔法を発動しきるなんて不可能よ。見てなさい、これが……」　そう言いながら、アテナはガララワ二に左手を向け、

「真の『燃える天空』よ」

原作の超の同呪文がマツチの火に見えるくらいの巨大な炎をぶつけた。

そして、それほどの炎にガララワ二程度が耐えきれぬわけもなく。

「ふう。汚い花火ね」

一瞬で焼きワ二へと化した。

「さ、明日からは勉強の時間よ。はやく魔法くらい使いこなしてもらわないと」

そう言って、アテナは俺に向かって満面の笑みを浮かべた。

第1話 さあまずは修行を始めましょう。(後書き)

というわけでちょっとキンクリするかも(汗)

といっても高々一週間位ですが。

こんな駄文ですがよろしく願いしますm()m

第2話 頑張って修行を続けましょう(前書き)

というわけで第2話です。

修行編はもう少し続くかと。

第2話 頑張って修行を続けましょう

「これで午前の授業はおしまいよ。よく耐えたわね」

「つ、疲れた……」

一週間後。俺はアテナの授業を受けながら魔力の使い方を習っていた。

いくら魔力があっても使いこなせなければ原作の農産物のようになるからだ。

その肝心の魔力は現時点でも俺の『才能を操る程度の能力』で原作の木乃香の魔力の数倍はあり、これからの間にまだまだ増える。

……え？今が西暦何年かって？

1600年。今の日本は丁度関ヶ原の戦いが起こっているだろう。

つまり、原作開始までに約400年程度の余裕があり、その間に色々できるというわけだ。

「さ、休憩終わり。始めましょう」

「ほいほい」

と言って俺は立ち上がる。

今の俺は肉体から『疲れ』という概念を抹消しているため、疲れというものがない。

……おかげで、こつぴどくアテナに絞られるんだけど。

うん。なんかしゃくにさわる。今度精一杯虐めてやろう。

「え？え？どんなことをしてくれるの？」

「勝手に人の心を読むなどあればと言ったのに」

「だって……」

そう言うアテナの頭を軽く叩き、俺は修行を再開した。

「まずは西の方向に魔法の射手、光の165矢！」

「くっ……魔法の射手、連弾、光の165矢」サギタ・マギセリエス「！！！」

アテナの指示通り魔法の矢を放つ。

この一週間はずっとこれしかやっていない。何故なら魔法の射手は最も万能の手札になるからだ。

そこまで魔力の消費が多いわけでもないのに、牽制にもなるし追尾する。まさに万能。

なんで詠唱してるのかって？いや、アテナがね、

「せめて修行時くらいは詠唱しなさい」

っていうものだからね……

いや、確かに昔詠唱というものをやってみたいとは思ってたんだけどさ……

いざしてみるととてつもなく面倒くさい。

呪文の始動キーなんて、「今からこの呪文放ちますよ」って言うて
るようなものじゃない。

また、あの詠唱時間がネックだ。俺はアテナと仮契約してるから
精霊達が自分から勝手に力を貸してくれるけど他の魔法使い達はそ
うではない。

例えば、『おわるせかい（コズミケー・カタストロフィー）』って
いう魔法があるけど、あれって威力がとてつもないかわりに、

『契約に従い（ト・シュンボライオン）』我に従え（ディアーコネ

ー・トー・モイ・ヘー）クリュスタリナー・バシレイア氷の女王来れ（エビゲネー・テートー）と

こしえの（タイオー・ニオン）やみ（エレボス）！えいえんのひょ

うが（ハイオー・ニエ・クリュスタレ）！全ての（パーサイス）命

ある者に（ゾーサイス）アタラクシア等しき死を（トン・イソン・タナトン）

其は（ホス）安らぎ也”おわるせかい”（コズミケー・カタストロ

フィー）
」

こんなにも長い。そんなことしてる間に魔法の射手で撃ちぬかれるぜ？

まあ、だからとは言えないが俺は今真面目に魔法の射手を練習してる。魔法の射手は、基礎でありながら応用性が高い。誘導性に優れ、牽制にもなると思えば俺の能力でどんな障壁をも突破する無敵の武器になる。

「次！北東に魔法の射手、属性は炎、数は365本！」

「くっ……『魔法の射手、サキタ・マギセリエス連弾・炎の365矢』イグニス！！！！」

それだけが理由じゃないけれど、まずはこれから習得しておこう。絶対に、強力な武器になるんだから。

そんなことを思いながら、その日の修行は終わっていった。

第2話 頑張って修行を続けましょう（後書き）

次は、雷の暴風が出てきます。
ぎぶみーかんそう。

第3話 ついに中級魔法の修行です（前書き）

ごめんなさい。

タイトル詐欺になってしまった……

第3話 ついに中級魔法の修行です

「よし。じゃあこれから中級魔法の修行に入っていくわよ」

「わかったけど、正直いるか？魔法の射手だけで十分だろ」

あれからさらに2ヶ月。ようやく魔力のコントロールの修行を終了した俺は、なんでもこれから中級魔法の修行に入るらしい。

……でも、正直魔法の射手だけでいいと思

ハイ・デイルイトウォーカー

「甘いわ瀧。上位存在である真祖の吸血鬼や竜種なんかは強力な魔法障壁を常に展開している。魔法の射手は確かに便利だけど、それはあくまでも基礎の基礎。上位存在に対する決定的な武器にはならないわ」

なる程。確かにそれは一理あった（・・・）だろう。それが俺以外の魔法使いだったならな。

「何か忘れてないか？俺の能力には『概念を操る程度の能力』もある。それで、魔法の射手に『障壁突破』の概念を加えてやればいいんじゃないか？」

こう言つてやると、アテナは顔を真っ赤にして、「うるさいうるさいうるさい！」と怒鳴つて来た。どこの炎髪灼眼の討ち手だ、お前は。

その日の修行はこれで終わり、その後は俺がアテナを調きよ……可愛がることになった。

すみません、俺が悪かったです。使えないとか言つてすみませんで

した。

「次！その岩に『雷の暴風』！その後、同じ標的に『魔法の射手』！属性はなんでもいいわ」

「了解！」

俺はアテナに指示された標的　ロックドラムに狙いをつけ、『雷の暴風』を放つ。その後、着弾するのを確認する前に虚空瞬動を用いて奴の背後に回り、適当な属性の『魔法の射手』を放つ。

……もう、魔弾の射手に『即死』の概念でもつけてしまおうか。でも、アテナに禁止されてるんだよね……はあ。

でも、中級魔法は俺の予想を遥かに超えて便利だ。

実際詠唱もそこまでかからず、ある程度の破壊力もある。が、俺が買っているのはその攻撃範囲だ。

俺の中級魔法は、普通に使うと何故かどれもが普通の魔法使いが使う『燃える天空』並みの攻撃範囲になる。

アテナによると魔力行使が既に普通の魔法使いの十〜二十倍は上手いため、こんなことになれるらしい。

いやあ、才能って恐ろしい。

「そろそろね。漣、準備はいい？」

「え？なんの？」

「私と戦う準備よ」

へ？

「じゃ、いくわよ」

驚いている暇もなく瞬動で近づいてくるアテナ。それを俺は『魔弾の射手』の弾幕を張ってよけ、

「『雷の暴風』」

一切容赦というものをなくした『雷の暴風』を放ち、後方へと下がる。

「いい戦略ね。でもその程度じゃ勝てないわよ？」

「わかってるよ」

さっきの『雷の暴風』は、あくまでも時間稼ぎにしかすぎない。

それに、あの程度の攻撃で倒せるのなら、もう流れ弾でとつくに倒している。

《神》という存在は、伊達ではないという所だろう。

「にしても、まさかここまで強くなってるなんてね……私の全力の魔法障壁がいとも簡単に破られたわよ？」

「そりゃあまあ、『障壁突破』の概念でも組み合わせないと、いとも簡単に防がれる自信があるからな」

そう言うと、アテナは急に笑い出した。

何かおかしいことを言っただろうか？

「明確に実力差を理解してその上最善手をつてるようになるなんて

……少し、実力を出すしかないよね。『シニスト・ミッサ・スタグネット 左腕解放固定』ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス 雷の暴風、デクスト・ミッサ・スタグネット 右腕解放固定『ヨウイス・テンベスタース・フルグリエンス 雷の暴風』

……つて、ちよつと待つて。

「……『マギア・エレベア 闇の魔法』……？」

「ま、そのようなものよ。私はこの世界で起こり得る全ての魔法が使用できるから。これは、原作の薬味が使った技の応用よ？これくらい耐えてね」

「ひでえ！！」

俺の文句をよそに、

デュプレタスフレクシオー

「双腕掌握……『疾風迅雷2』、といった所かしらね」

「なんで、『雷天大壮2』じゃないんだ……」

「手加減よ」

「嬉しくない手加減っ！」

俺の言葉を最後に、アテナから有り得ない量の気が湧き出る。どうやらくだらない会話はこれで終わりということらしい。

「……上等だ。いくぞ戦女神。気と魔力の貯蔵は十分か」

「いくら勝利フラグを立てたと言ってもね、まだ漚と私の間には天と地程の実力差があるのよ！！」

アテナが言葉を言うが早いか、俺は瞬動で後ろへと移動した。

「食らえ……『燃える天空』っ!」

漣は開幕を告げると言わんばかりに今の彼が出せる最大級の呪文を放つ。

障壁突破の概念が組み込まれた一撃は、果たしてアテナには当たらなかった。

「……チツ、やっぱむりか」

「当たり前よ。今の私は擬似的な雷状態なのよ? そんな私のスピードならその程度の速度の攻撃は簡単に回避出来るのよ」

あっけらかんと言うアテナ。

「なら、俺も『新型』……試してみるか」

「あら、私との勝負中に考え事とは余裕なのね」

「何っ……?」

気がついた時には既に遅く。

アテナは『雷速瞬動』を用いて俺の近くに來ていた。

「やべっ……」

「しっかりと食らいなさい? ゼロ距離『雷の暴風』……」

漣が受け身を取る暇も無く、ゼロ距離で『雷の暴風』が放たれる。

それを漣は肉体に『完全魔法無効』の概念を纏わせることによってダメージを軽減する。

「お前……なんか口調違うかい?」

「しょうがないじゃない。戦いになると勝手にこういう口調になるのよ」

「なんて性格だ」

「全くね」

こんなふざけた会話をしているが、それは表だけで裏では漣は焦っていた。

（どうする…… 攻撃は当たらないわ、アテナの動きは速すぎるわ……
…こんなんにどうやって勝てっの？）

「また考え事？」

「っ！」

漣は虚空瞬動を用いてその場から離脱し、今彼が持つ最大の技を使うことにする。

（どうせ勝てないんなら…… 当たって砕ける、だ！）

「いくぞ！」とこしえのやみ、えいえんのひょうが、” 範囲拡大” っ！！」

刹那、アテナは後方に下がり…… 体が凍りついた。

「…… ということ？ 『えいえんのひょうが』は250フィート四方しか凍らないんじゃないの？」

アテナは呪文を詠唱された瞬間に安全地帯である300メートル後方に下がっていたが、何故か凍っていたのだった。

「ま、ネタばらしは今度つてことで。いくぞ…… 『燃える天空“一点特化”』、『千の雷“一点特化”』、『冥府の石柱“一点特化”』、『おわるせかい“火力優先”』 っ！！」

瞬間、漣の近くで発動する能力。そして、その魔法が小さく、いや、「収束、していつている……？ まさか、範囲殲滅呪文ん小さく纏める事で、その余剰分の威力をも一点にまとまっていたいの……？」

これが、漣のまだ未完成の『新型』。魔法の攻撃範囲・破壊力を変化させる技。

攻撃範囲が広がればその分呪文の『密度』が減少するため、破壊力が減る。これはいい。

真の隠し玉は、“一点特化”だ。

ただでさえ圧倒的な力を持つ範囲殲滅呪文を一つの小さい形に凝縮することで、本来ならば意味のない威力をも相手に与える技。

威力という一点ならば最強クラスの漣の奥義。

そして、変化した魔法は投擲槍へと変化していた。

「……へえ。そんな技があるなんてね」

「まだ未完成だが……これで勝つ！」

漣は、燃える天空が変化した槍を構え、

「これでっ……どうだっ……！！」

アテナに向かって全力で投げた。

「くっ……これは、まずいわね……しょうがない。完全障壁」

アテナは、数十枚に及ぶ障壁を展開してそれに望む。

「甘いな……。俺の槍には、『障壁突破』の概念が」

「そんなことくらい考えてるわよ。私も『投擲武器無効』の概念を障壁に付与してあるんだから」

「何っ！！？」

漣の驚愕とアテナの余裕と共に槍がアテナの障壁へと食らいついた。一枚、二枚目までは順当に破り、三枚目で拮抗し、そして四枚目で、

「馬鹿な……」

「まさか、4枚も破られるなんてね。恐れいったわ」

槍は、完全に威力を消失し、消滅した。

「くっ……まだだっ！」

その後、数十回に別れて試すが結果は同じだった。

何度投げてもアテナに届くことは無く、それでも投げ続ける漣。

毎回障壁を張り直し、万全の状態で漣に向かうアテナ。

そして、月が登りきり、ちょうど十二時間がたった時。

「ちく……しょうが……」

ついに、魔力ぎれで漣は崩れ落ちた。

「ふう。まさかこんなにも強くなってるなんてね」

そう言っつて、アテナは漣の頭の下に自分自身の膝を入れる。

俗に言う『膝枕』の状態だ。

「ふう……強くなってるのは嬉しいけど、ね……絶対に無理だけはしてほしくないな。だっつて」

言っつて、疲れきって寝ている漣の唇に自分の唇を近づけ、

「貴方は、私の御主人様なんだから」

唇を、重ねた。

第3話 ついに中級魔法の修行です（後書き）

次はリベンジマッチになる予定です。

はあ……いつになったら原作に入れるのやら。

感想待ってます!!

第4話 魔法を覚える理由です（前書き）

なんか書いてる内に過去話に……

今回はバトルはありません。ご注意ください。

第4話 魔法を覚える理由です

「そういえば、ね」

「何だ？」

初めての戦いから一週間。それからの修行はずっとアテナと戦うことになった。

無論、戦うか自分一人で修行するかは俺が選べるが、この一週間はずっと挑み続けていた。

そして、今日もまた敗北し、いつものように俺はアテナの膝枕のお世話になっている。

にしても柔らかいな、アテナの膝……なんかもう、癖になりそう。

「私はいつでもOKよ!!」

「だから勝手に人の心を読むな」

そんな変な会話を無理やり断ち切り、アテナの質問に答える事にする。

「なんで貴方は私に魔法を習ってるの？確かに、『概念を操る程度の能力』には限定条件があるとはいえ、わざわざ魔法を使わなくとも……」

なる程。問いはそのことか。

確かに俺からアテナに魔法を教えろと頼んだ。その理由は色々あるけど、真面目な理由とおふざけな理由、そして誰にも知られたくない真の理由の三つがあるんだよなあ……

「三つとも教えてよ」

「その能力万能すぎないか!？」

いや、いくら何でも万能すぎるだろ!!まさかその能力オンオフが出来るんじゃない

「ええ、出来るわよ?当たり前じゃない」

「……もういいです」

ええい、もう諦めたわ。

「まずまともな理由としては、一つ、例えば石ころがかさばる。二つ、俺はあくまでも人間だから石ころを投げるだけじゃ当たらない。って所か」石ころ一つ一つは軽くても、纏めて持つと結構な重さになる。また、俺は少々特殊な能力を持った人間（ここ重要）だ。どこぞの合法ロリみたいに人間止めてないし、どこぞの筋肉バカみたいにもの凄く筋肉を鍛えた訳でもない。

けど、魔法なら違う。

魔法ならかさばらず、下準備が無くともその場で出せるため万能性が高い。

また、俺の筋力はまだそこまで鍛えているはずもなく、せいぜい一般人をかなり強くした程度の筋力しかない。

そんな俺が石ころを投げて当たるか？答えは否。

だからこそ、俺は魔法を学んでおきたいんだ。

「……でもそれ、全部『概念を操る程度の能力』で解決出来るわよね？」

うっ、確かに。痛い所を突かれた。

まず、概念の『質量』を否定すれば、石ころがかさばることはない。また、『因果逆転』の概念でもつけておけば、『刺し穿つ死棘の槍』みたいに投げる前に当たった（……………）という現象をおこせる為にこの問題も解決する。

となると、裏の理由を話すしかない。

「裏の理由は、一つはせっかくネギまの世界に来たんだから魔法を使いたい。そして、もう一つは……俺の信念だ」

せっかくネギまの世界を思いっきり崩壊させられるんだから、真田弦一郎のように真っ向勝負をしたい。

ナギの『千の雷』を、俺の『雷の暴風・一点特化』で破ってみたいし。

「もう一つは、悪いが声には出せない。知りたいんなら俺の心を読め」

「全く……しょうがないわね」

もう一つは、単に俺の信念によるものだ。

第二次世界対戦が終わった直後、俺は生き残る為に何でもした。安全な水を飲む為に、遠い川まで数十キロに及ぶ道を一人で歩いたり、枯れ葉を食べたり、死にかけながら働いて金を稼いだ。

父親は戦争で死に、母と共に下の三人の弟を養っていくために俺は頑張った。

やがて、ある程度の余裕が出来てくると、俺は新しい会社を立てた。最初は酷かった。注文はろくに来ず、状況は悪くなるばかり。それでも、なんとかやって来れたのは母のおかげだ。

時には俺を支え、時には俺を甘えさせてくれた母のおかげで、俺の会社は躍進をとげ、日本有数の大企業にまで成長した。

それを見届けて安心したのだろう、母は安らかに眠りについた。

ここから言えることが一つだけある。俺が信用出来るのは俺が自分で育てた物だけだ。

確かに『概念を操る程度の能力』は強い。だが、それはアテナに与えられた(……)能力であり、俺が自ら習得した(……)能力ではない。

だから、多分俺は近いうちに『概念を操る能力』を一時的に封印して、他の能力を鍛えるつもりだ。

そういう所では、『才能を操る程度の能力』はありがたかった。あれは、才能を変化させるだけの能力であり、自分自身の強化にはならない。俺自身が鍛えなければ何の意味もない能力なのだから。「なるほどねえ」

そんな俺の心を読んだのだろう。アテナが俺に笑いかけてくる。それを、俺も笑みで返した、その時だった。

ビーツ、ビーツ、ビーツ！

突然、アテナの持つ無線機から警報が鳴り響いた。

「何だ、これは!!?」

「侵入者よ!!それも、結構力のある」

「結構？違うな。私は世界最強の魔法使いだ」

急に横から声がしたのでその方向を見ると、そこには、

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル……」

「その通りだ」

ハイ・デイルイトウォーカー

真祖の吸血鬼、エヴァンジェリンが笑ってこちらを向いている姿があった。

第4話 魔法を覚える理由です（後書き）

感想、待ってます。

第5話 頑張って味方につけましょう

「なんでこの場所がわかったのですか？『闇の福音（ダーク・エヴァンジェル）』」

「ふん。妙な臭いがしたからな」

「妙な臭いとは？」

邂逅後、何時までも立ち話はなんだと家に招待し、エヴァンジェリンがそれを受けてから五分後。

俺とエヴァンジェリンは、テーブルを挟んで向かい合っていた。

にしても、こんな偏狭の地でまさか原作キャラと会えるとはな……

「お茶が入ったわよー」

「お、ありがとアテナ。そちらもどうですか？『闇の福音』」

「……頂こう。後、私の事はキティ以外ならなんとよんでもいい。

ここは交渉の場ではなく、単に変な魔力を感じたから来たまでだからな。後、感じたのは世界でも私だけだから、他の者はいないだろう」

「……わかりました、キティ」

「……貴様、あえてやってるだろ？」

「いえいえ、気のせいですよ。絶対に弄ってて楽しいとか、もっと弄ってたいとか、そんな事は考えていませんよ？」

「とりあえずその口を閉じろ」

「あらあら、言葉攻めが好きなんですか？全く。これだからエターナルロリ娘は」

「……ちよつと表に出ろ」

「だが断る！！」

「断るなあっ！」

こんな風にエヴァを弄って遊びつつ、アテナが何か持ってきてくれるのを待つ。

「はい、キティちゃん」

「貴様もかああああっ！」

この後、外で半日殺し会ったことは想像にかたくないと思う。

「で、だ」

十二時間後。家に入って何もなかったように話し出す俺達。

……いや、俺は悪くない。ただちよーっと、モーセの十戒みたいなことや、周りの地形をちよっぴり、そうちよっぴりだけ変化させたりしただけなんだ。

「現実逃避していても意味ないわ」

……ああ、そうですね。

「話というのは、その女が『闇の魔法』を」

「アテナよ。名前と呼んで」

「アテナが『闇の魔法』を使ったことに関してだ」

いくら魔法で元に戻したとはいえ、半径十キロを完全に崩壊させた五分後に、こんなにまともな会話が出来るこいつらは凄いと思う。まるで、人間じゃないみたい　って、神と吸血鬼だった。

「……今何か変なこと考えたでしょ」

「ん？考えてないわ」

「……話を続けていいか？」

「「だが断る！！」」

「断るなあっ！」

……なんて弄つてて楽しい子なんだろう。もっと虐めたいな。

「ま、冗談はいいとして、なんで私が使ったのが『闇の魔法』だったのかわかったの？」

「私は開発者だぞ？わからないわけがあるまい。まあ、どこか私の

使っていた術式とは違っていたが……」

「ああ。『デュプレタスプレクシオー双腕掌握の事?』」

「それもあるが……問題は、私がこれを誰にも教えていない、ということだ」

「……あれ? ヤバい雰囲気?

「貴様等は一体何物だ? 何故、誰にも教えていない『闇の魔法』をあそこまで扱える?」

「アテナさん、ヤバいですよ。いきなり俺達の秘密がバレそうですよ。」

「え? ただの神とかなり異常な能力を持つ人間だけど?」

「……はあ、駄目だこりゃ。」

第5話 頑張って味方につけましょう（後書き）

次の話で一気にキンクリ（時間を飛ばし）ます。

後、アスナですが、原作通りのアホの子か魔改造、どちらがいいですか？

第6話 女神様は頭が少々軽いようです

side エヴァ

「神だと？」

「うん。神様と少々異常な人間。オツケー？」

「いや、オツケー？なわけがないだろう」

自分の招待を聞かれて神と答えるだと？本物のバカか？こいつは。

「むー、信じてないわね？」

「だから信じる筈がないだろう」

「なら証拠を見せてあげる。来い！アイギス！」

な、馬鹿な、アテナの楯だと？

確かにそれは神と名乗るに相応しい物だが……

「……………」

「……………」

「あ、ここ天界じゃなかったから来ないんだった」

……舐めてるのか？舐めてるんだな？

「うーん……どうしよう……ねえ洩、何かいい案無い？」

「抑えてる魔力とか気とかその他諸々を解放すればいいだろう」

「あ、そっか。流石洩。頭いいね」

……馬鹿にしてるんだな？そうなんだな？

それに抑えてるわけがないだろう。奴はこの私とまともにやりあっ

たんだぞ。そんなものをしているわけ

「ふう。封印、解放」

そんな私の考えがまるで馬鹿に思える程の魔力、気、そして 感
じたことのない力の奔流。

「あ、ああ」

「で、これでいい？」

そう言つて私を見てくるモノ。

いまここにいれば確実に殺される。今感じるのは先程まで感じていたソレがそよ風にすら感じる程のモノ。だから、早く、

逃げろ！

逃げろ！！

ニゲロ ！！！！

「もういいだろ、アテナ」

「わかったわ、漣」

結局、私の足は動く事はなかった。

今思い出しても怖気が走る程の圧倒的な存在感。相手が本気だった
ら私の体は間違いなく細切れになっていただろう。

「で、認めてくれた？」

「ああ。痛いほどにな」

もうどうにでもなれ。

そんな事を思いながら私はアテナの説明を聞く事にした。

side エヴァ end

side アテナ

ふう。なんかあった。

全く、こっちじゃ本気の解放って疲れるのよ？だから出来るだけ使わないようにしてるのに……

今私がしたのは、天界での私の力　つまりは、本当の力の解放。
この世界に来てから澪と試合をして、その後に見せたら澪も引きつったような表情をしてたつけ。

「　というわけ。わかった？」

「……ああ。なんか馬鹿にされてるような理由だな」

「む。そんな事言ったら『双腕掌握』教えてあげないわよ？」

「……何？あれを私に教えてくれるのか？」

「まあ、せつかくだしね。何なら他のいい魔法も教えようか？」

そう言っていると嬉しそうな笑みを浮かべるエヴァ。

……ヤバイ。可愛すぎる。お持ち帰りしようかしら？

side アテナ end

聞いている所ではアテナがエヴァに適当に捏造した理由を話し終わ
った所だった。

……さて。最近考えてた事を話すか。

「なあ二人とも。話があるんだけど」

「どうしたの？」

「……待て。何故私まで」

「……会社、作らないか？」そう言つと、一気に呆れた顔をされた。
なんです。

side エヴァ

「会社だと？」

「うん、会社」

「いきなりね。どうして？」

聞く所によるとアテナも初耳のようだ。

しかし、なんで会社なんだ？

「いや、キティは初耳だと思うけれど、この土地はもの凄い有名な
金属の鉱床なんだ？」

「有名な金属とは？」

「金、銀、白金……恐らく世界最大の鉱床だ。何千万トンにも及ぶ、
な」

ば、馬鹿な……

「それは元々わかつてるわ。でもなんで会社なんて？」

「これだけの元手があるんだ。必ず成功する。そして、俺は世界一
の会社を作りたいんだよ！」

「……面白そうね。私は乗ったわ。エヴァは？」

「待て。どうして私を誘う」

「だって、友達いなさそうじゃない」

な、泣いてなんかいない。

「な、何が悪い！」

「それもあるし、弄ったらたのし……お前がいたら楽しくなると思
ったからだ！」

嘘だよな！絶対に『弄ったら楽しくなるから』だよな！

「でも、選択権はあなたにあるわ。どうする？」

私、か。

確かに、私もコイツラといたら楽しい。だが……

「どうするの？」

そして、悩みに悩んだ結果。

私は、彼らの手を

side エヴァ end

side アテナ

「わかった。私も共に行こう」

取った、わね。

にしても、まさか会社を興すなんて言い出すなんてね……少々予想
外かしら。

まあ、澁の企業センスなら世界一の企業だって作れるかもしれない
わね。だって、前世で一人で日本有数の企業を作り上げたんだから。
ま、私も楽しめそうね。それはそうとして、今日は何を使って虐め
てくれるのか楽しみだわ。

side アテナ end

それから、あつという間に時が去っていった。

まずは俺とアテナとエヴァの『闇の吹雪』で鉱床を掘り、その余波で出た鉱石を売って元手を得ると、従業員を募集して会社を興した。この募集を書くとなると、一話文の文字量になるので今は省略する。最初は二百人程度だった会社も、俺の手腕と天才的な変態技術者どもや、強面の営業、頑張り屋な工場の野郎どもの頑張りにより、瞬間に勢力を上げていった。

最初の数年間は話にもならない程度の知名度だったが、興してから十年でそこそこの有名になり、五十年で世界各地に子社を持つ世界有数の企業になり、百年で世界全てに子社を持つ、世界最大の企業になった。

……まさか、僅か百年で世界一になるとは思ってもいなかったけど。そして、俺の会社にある一つの中二な名前がついた。

子社は存在するのだが誰も本社の場所を知らないと理由でつけられた異名は、『ミラー・ジュ・タスク 屋気楼企業』

確かに本社の場所は強力すぎる認識阻害の結界に守られた土地に存在する場所で、企業全体で働く数千万人の内、本社の場所を知っているのは僅か百人にも満たないのだから当然とは思うのだが、まさかこんな異名がつくなんて。

ちなみに、かなり気にいつている。

そして、さらに二百年後。

会社もさらに伸び続け、やろつと思えば世界すら牛耳れるようになった時。

俺達は、ある一人の人物を弟子にした。

その人物は、

「師匠、流石にそれは……」

ジャック・ラカン。

さあ、これは原作破壊のプロローグだ。これからさらに破壊してやる！！

第6話 女神様は頭が少々軽いようです（後書き）

感想等、お待ちしております。

アスナ、どうしょ……

第7話 ナギとジャックの邂逅です（前書き）

つ、疲れた……

ナギとジャックの口調がわかんねorz

第7話 ナギとジャックの邂逅です

「よし、今日はここまでよ」

「つ、疲れた……」

「もう、だらないわねジャック」

「師匠達が異常なんだよ……」

この世界に来てから約三百七十年、原作の三十五年前、俺とアテナは旧世界、つまり地球の本拠地としている島　俺が名も無き島と名付けた　で、ジャックを虐め……修行をつけていた。
ネームレス

「にしても酷すぎないか？いきなりバロルコングの島に行って虹の実を取ってこいなんて」

「へえ？澇によるオシオキが必要みたいね？」

「もう文句言いませんから許して下さい女神様」

まあ、こんな感じで楽しくやっている。

ちなみに会社（弥生グループと俺が名付けた）の方も俺が終身名誉会長としていまだに実権を握っている。まあ、どうせ現社長も俺の腹心の部下だからいいんだけど。

「会長！」

「どうした」

緊急時にしか連絡を入れるなといっている社長（ロバート、六十五歳）から連絡が入る。

奴も俺無しで現在広がりすぎたグループを運営できる程にキレた人物なので、これは相当に厄介な話だと思いき引き締める。

「魔法世界で戦争が勃発しました！」

この日、俺はついに何かが始まるような音を聞いた。

「状況はどうだ！」

「はっ、それが……」

状況を試しに聞いてみるとこれまた原作通り。

現在とはにかく帝国側が押しており、このままだと連合側が負けてしまうという。

そんな中、俺は一つの鉄の掟を敷いた。

それは、『どちら側にもうまい事取り入る事』。

機動戦士ガンムでアナ・イム・エレクトロニクス社がとった方法と同じだ。

「いいか、これはチャンスだ！このチャンスを利用して出来るだけ連合と帝国から金を巻き上げる事だけを考える！」

「しかし会長、それは……」

「非人道的だという事はわかっている。だからな、巻き上げた金で難民達を片っ端から救っていくんだよ！例え偽善だとしてもな、戦争なんて始まつたらなかなか終わらないんだ！その中、装備や物資を出し渋って無駄な犠牲者を増やすくらいなら、いつそのこと奴らの金を国庫から無くして財力を切らせて戦争を終わらせた方がよっぽど都合がいいだろう！」

「た、確かに……」

俺に反論してきた部下も納得して黙る。

確かにそういう考えもあるだろう。だが、弥生グループは世界一の企業っただけで、まだ国を、それも世界を二つに分ける連合を経済

封鎖できる程の財力はない。

だから、奴らの金を片っ端から使わせ、金を搾り取る。

そして、『財力不足』という理由で戦争を終わらせてやるのだ。

税金を搾り取るうとしても、俺の子飼いの部下の一部が元老院や帝国の高官に紛れ込んでいるため、そんなことはさせない。

さあ、この戦争、何時まで続けられるか見せてみるがいい！

side ナギ

「『百重千重と（ヘカトンタキス・カイ） 重なりて（キーリアキ

ス・） 走れよ稲妻千の雷！！』
アストラブサト・キーリブル・アストラペー

俺の放った『千の雷』が敵を蹂躪する。

にしても、こんな雑兵ばかりじゃ楽しくないな。

「おいナギ、何を考えておる？」

「いやあ、強い奴が出て来てくれないかなあ、ってさ」

「なんだそりゃ？」

「仕方あるまい詠春。ナギは頭がかなりスカスカなのじゃから」

「いやあ、それ程でもないぜクト！」

「……馬鹿にされた事にすら気づいていませんね」

「仕方あるまい。ナギなのじゃから」

折角腕だめしに戦争に参加したつてのに、倒しても出てくるのは雑魚ばかり。

早く強いのと戦いた

ズドンッ！

「な、何だあつ！？」

「いよう、『千の呪文の男』ナギ・スプリングフィールドつてのは

「お前か？」

出て来たのは、褐色の肌をした男。その手には、燃え盛る紅蓮の色をした片手剣。

「目でわかる。こいつは、強者だと。」

「ああ。お前こそ何者だ？」

「俺は傭兵剣士ジャック・ラカン。よろしくな」

「ジャック・ラカンじゃと！？」

「知っているのかゼクト！？」

「ああ。弥生グループに雇われている東で無敵と名高い傭兵じゃ」

「……無敵！？」

「そりゃ、俺と同じじゃねえか！？」

「待てよ爺さん。俺様は無敵なんかじゃねえよ。ひたすら修行してもなお勝てない敵がいる、ただの傭兵剣士さ」

「そんな事言ってるけど、かなり強いんだろ？俺とやろうぜ！！」

「まあ、その為に俺様は来たんだが……ちよつと待ちな」

そう言うが早いか、剣を持っていない方の手でメガホンを取り出す。何故メガホン？と聞く前に息を吸い、

「双方に通達する！！今からこの俺様、ジャック・ラカンと赤き翼の『千の呪文の男』、ナギ・スプリングフィールドが一騎打ちをする！その余波に巻き込まれたくない奴はとつと逃げな！！！」

と言うが早いか、周りの艦隊はとつと逃げていきやがった。

「さ、始めようぜ」

「そうだな……いくぜ！！」

と言うよりも先に、俺は無詠唱の魔法の射手をジャックへと向ける。

「へっ、どうした、こんなもんか！？」

「『来れ（ケノテートス・）アストラフサト 虚空の雷薙ぎ払え（デ・テメトー）

ディオス・テュコス
雷の斧！』」

魔法の射手をジャックが防ぎ終わる前に、俺は『雷の斧』を奴に向かって放つ。

確実に当たるという予想の元放たれたそれは、

「『自己領域』」

完全に避けられ、後ろから（・・・）拳による一撃をもらった。

side ナギ end

「いや、いい一撃が入ったな」

「そうね。さっきの『自己領域』の展開もスムーズだったし、やっぱりナギじゃ勝てないかしら」

「俺らが魔改造し過ぎたからだろ」

「それもそうね」

戦争が起こり、紅き翼が戦場に出てから二年後。俺とアテナは原作でジャックがナギと戦う1ヶ月程前にジャックにナギと戦うよう指示した。

いや、そっちの方が面白そうだったし、なんというか、まあ、気分だな。

そして、さっきのジャックの言葉により、一瞬で賭が発生している。倍率はナギが2・3倍、ジャックが2・5倍。これは知名度の関係もあるんじゃないだろう。

だが、実力の違い。それは圧倒的にジャックにあると思う。

「まあ、部屋でベッドで愛しあいながら衛星中継で戦闘を見て、おまけに賭屋が破産する程の金額をジャックにつき込みながら思うことじゃないわね」

「なんだ。嫌なら早く止めてくれとさえいえばいいのに。さ、仕事仕事」

「待って！こんな時に寸止めは止めて！！狂っちゃうよ……」

「なら、しっかりとおねだりの言葉を言うんだな」

「そ、そんな……」

と、焦らずに焦らして限界までいった所で言う事を聞いてあげた。
そしてアテナを可愛がりながらテレビの方に視線を向ける。
さあジャック、実力の違いを見せつけてやれ!!!

第7話 ナギとジャックの邂逅です（後書き）

『自己領域』等は電撃文庫出版のウィザーズ・ブレインを元にして
います。

次回は戦闘……になるのかな？

第8話 チートによる蹂躞です（前書き）

ラカン武双……

ラカンまじチート。

第8話 チートによる蹂躪です

遠くない未来。どこか別の並行世界で、一つの真理が発見される。

その真理とは、その世界でしか発見される事のないであろう、一つの可能性。

世界は情報で出来ている

そんな可能性を秘めた世界で、一つの兵器が発明、いや作り出された。

その兵器の名前を、『魔法士』と呼んだ。

「ふう。まあ、こんなもんだろ」

ナギの『雷の斧』をいとも簡単に回避し、後ろから一撃を加えたジャックはそう呟いた。

「ま、まだ終わっちゃいねえぜ……」

地上に受け身もとれずにぶつかったナギは、しかしまだ立っていた。

「まあ、ちよつと待つとけよ『千の呪文の男』。先にこいつらをかたずけるからその後で続きをやるうぜ」

そう言つて、ラカンが指差したのは、

「なめられたものだ……」

「全くじゃ……」

「ええ、その通りです……」

明らかに戦闘体勢をとっているナギ以外の『紅き翼』の面々。

「さ、来いよ。相手してやるぜ」

「『上等じゃ（です）！！！』」

その言葉が開幕の狼煙となったかのように、四人は動き出した。

side ジャック

ふむ。確かに強い。今までの敵とは格段に違う。だが

「神鳴流」

「遅い。『運動速度を120倍、知覚速度を120倍』」

まだまだ俺様の敵じゃねえな。

「そらよっ！」

「な、馬鹿」

落ちていく神鳴流の剣士は俺様が殴った瞬間が決して見えなかった
だろうな。

まあ、当然だな。今の俺様は、『燃える』」

「だから遅いんだよ」

運動速度が120倍になってるんだからな。

side ジャック end

ほう、ジャックの奴、いきなり『紅蓮』を使ったか。

「ねえ、どうなってるの？」

「ジャックが運動速度を120倍にして戦ってるよ」

「……うわ、それ反則じゃない？」

「まあな」

アテナの言う事ももつともだと思う。

俺とジャックが仮契約（あくまで宝石を使った物だ。あんなムサイ男とキスなんて俺はしたくない）でジャックが手に入れたアーティファクト、それが騎士剣『紅蓮』。

元々は別の世界のアーティファクトの筈なのだが、何故か出て来た。どうしてこうなった。

まあ、それはおいといて、その力は、大きく分けて二つ。

一つは、自身の運動速度、知覚速度を異常に上昇させる『運動係数制御』。

単に運動係数を上昇させるだけでは作用反作用の法則により自らが与えた衝撃の作用で自滅するが、そうではなく、『与える衝撃を等倍になる』運動を行うため、衝撃で自滅することが無くなる。

まあ、自然と火力不足という問題が発生するんだけど、そこは俺達が鍛えたラカンのチート筋力と『紅蓮』のもう一つの能力がそれを補うだろう。

……お、動くか。

side ラカン

「はっ、ガラアキ」

爺言葉の坊主に一撃を入れようとすると、急に体が重くなる。「今ですよゼクト！」

「ナイスじゃアル！食らうのじゃ、『燃える天空』！！」

ちっ、どうも動きが悪くなったと思ったら、もう一人の重力魔法か！しかし、あの『燃える天空』は避けるのが難しそうだ。

……じゃあねえ、一つ隠し玉を使うか。

「いくぜ、『紅蓮』」

俺様は、120倍の遅さでゆっくりと近づいてくる『燃える天空』に『紅蓮』を突き立て、

「『情報解体』」

攻撃する。

刹那、勢いのあつた『燃える天空』が 音すらたてずに、消滅した。

「馬鹿な……」

「そんな……」

茫然自失としている二人の意識を『紅蓮』の柄で刈り取り、向かってくる『千の呪文の男』に対しても同じことをする。

時間にして僅か一分程。それが、俺様と『紅き翼』の初対決時の結果だった。

side ジャック end

「まあ、当たり前前の結果だな」

「そうね」

戦いの結果を見た率直な感想がそれだった。

いや、そうとしか言うことがない程の、圧倒的な実力差があったからかもしれない。

それ程の戦いだった。

「しかし、

『情報解体』はやっぱリチートだな」

「全くよ。あそこまで酷いと後衛の魔法使いは本当に涙目ね」

二人で笑いながら話す。

情報解体というのは、騎士剣に共通する最強クラス的能力。

その実態は、攻撃対象を『情報の側から』攻撃して破壊するという類の物。

もし情報の側に対するまともな防御をしていなかった場合、無条件で攻撃対象を消去するという反則技。

……ちなみに、この剣の劣化版である『冥王六式』という剣をうちの変態技術者どもが作りあげ、いまではうちの私兵の基本装備になっている。

「じゃあ、そろそろ行こうぜ」

「……えっと、どこに行くんだっけ」

「イギリス支部だ。緊急の依頼人が来ているらしいからな、早く着替えろ」

「しょうがないわね」

アテナを着替えさせ、また自分も正装に着替えて空間転移でイギリス支部へと向かう。

そこで、俺達を待っていた人物とは

「さあ、交渉を始めましょうか」

「そうじゃな」

ウイスペルタティア王国の王女、アリカ・ウイスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア。

一体どんな事になるのだろうか、俺は心を大きく弾ませた。

第8話 チートによる蹂躪です（後書き）

一応予定としてはラカンとテオドラ姫をくつつけます。

感想欲しいぜ。後、アスナをどうするかに対する意見もな（魔理沙風）

オリキャラ設定

弥生 澪 ヤヨイ・ミオ

性別……男

年齢……400歳（外見年齢は23歳程度）

能力……概念を操る程度（封印中）、才能を操る程度（封印中）

身長……186cm、体重……63kg

髪の色……黒

瞳の色……黒

特殊技能……錬金術（鋼の錬金術師）、魔術（Fate/stay
night）、七夜体術（月姫）、神鳴流……etc

尾行

限りなく化物に近い人間。不老不死だが、それはあくまでも『死』
という概念と『老化』という概念を取り除いているためそうなっ
ている。

ジャックに会う前に、ひたすら自分の体を鍛えに鍛えた為、外見か
らではわからないが物凄く引き締まった身体をしている。肉体強度
は何もなしでラカンの気合防御状態と同等。

魔法の実力はアテナを除いて世界最強。仮にMM全軍と戦っても、

鼻歌まじりで傷一つ負わずに殲滅する事が可能。ただし、本人はただ時期ではないと言ってやらない。

世界トップの複合企業『弥生グループ』の名誉会長であり、設立してから400年たった原作開始時期までも実権を握り続けている。異常な程脳の構造がしっかりしており、普通は不可能な『運動加速』と『自己領域』を同時に扱え、また『分子運動制御』等他の魔法士の能力をも扱える。

アーティファクトカード紹介

称号……世界の離反者

色調……無色（白ではなく、人間には見えない波長で書かれている、神と仮契約した澪のみのカード）

カード番号……x23atp7（イレギュラーな為読めなくなっている）

徳性……

方位……

星辰性……

アーティファクト……『無限の武装』

能力……???

アテナ

B 93、W 57、H 79

年齢（乙女の秘密よ） 肉体年齢17歳

体重（乙女の秘密よ） 身長165

金髪碧眼

尾行

ドMな女神様。 年齢は禁則事項。

昔暇つぶしに下界を除いていた時、漣の容赦ない調教とその優しさにガチ惚れして、死んだ時に権力を乱用して一緒に転生した。

世界最大のイレギュラー。 神としての強大すぎる能力を7割方封じているが、それでも漣よりもほんのちょっと弱い位の世界最強クラスの人。

普段はバカっぽいが、世界全ての知識を持っている。

最も好きな攻めは（自主規制、聞きたい人はメッセージを送って下さい）

オリキャラ設定（後書き）

……感想には書かずにメッセージにしてください。

そして見た後は即刻削除して頂けると作者としてはとても嬉しいで
す。

第9話 王女殿下との交渉です（前書き）

出来たので投稿します。

タイトル詐欺がもはや普通になってきた感が……

第9話 王女殿下との交渉です

「では、ご用件は如何でしょうか？」

「護衛を依頼したい」

（まあ、予想通りだな）

そんな事を思いながら、俺はアリカの方を向いた。

向こうは俺とアテナの本当の職業を知らず、只の受付だと思っている。

まあ、そんな事を言っていると、

「では、よろしく頼むぞ。くれぐれもアリカ様をお守りするように。こんな依頼が来る事自体が名誉なんだからな」

と、護衛の一人がでかい口を叩いて来る。

それでもまだ我慢だ。お客様は神様だからな。

「で、報酬の方ですが」

「ん、そんな物は必要あるまい。そちらは世界一の会社なのだろう？それなら」

言葉は、最後まで続かなかった。

怒った俺とアテナが、無詠唱の『えいえんのひょうが』をぶつけたからだ。

「な、何をする！」

俺達の『えいえんのひょうが』を食らった護衛が五月蠅いが無視してアテナにアリカを別室へと運ばせる。

「こんな事をしてただですむと思うなよ……私達の力があれば、こんな企業一つ……」

「ああ、それ無理」

あくまでも減らず口を叩こうとする護衛を一言で黙らせる。

こんな事をするくらいならアリカと交渉したいのだが、そんなものはまあいい。

「無理、だと……」

「ああ、無理。まず第一に、お前らの国に食料を供給しているのはどこだと思っ？」

「それは……弥生グルー……はっ!？」

最も聡明そうな護衛の中の一人が自分達の発言の愚かしさに気づいたが、他の数人は黙らない。

むしろ、愚かな発言を繰り返しているだけだ。

「ふざけるな!! 先程の発言を取り消せ!!」

「私達と本気で戦争する気か!!」

「だから、戦争以前の問題だよ。お前らはその一人以外無能だな」

と言った瞬間に、

「表に出ろ!!」

「我ら魔法使いの力、思いしらせてやる!!」

と、一人以外杖を向けて喧嘩を売ってくる。

その一人は、どうやら俺の実力に気がついたらしく、顔を青くして震えている。まあ当たり前だろう。

俺一人の実力が、連合全勢力よりも遥かに勝るという現実なんて、気がつきたくないだろうし。

結局、俺はその喧嘩を買い、外へと出ることにした。

お客様は神様だが、金を払わない奴は只のクズだ。そんなクズには超えられない格の差というものを教えてやるよ!!

side アテナ

「ふう。全く、困ったものね」

「……すまない」

別室で愚痴を吐いていると何故かアリカに謝られた。なんで？

「どうして謝る必要が？ 私達は王女殿下とは違う、下々の者ですよ？」

実際は天上の神だけど。

「アリカでよい。言葉使いも普通にせい」

「わかったわ、アリカ。でもどうして？」

「悪い事をしたら謝るのは普通であろう？ 全く、あの頭の固い護衛どもは……」

あら、びつくり。ちよつと原作よりも頭が柔らかいのね。

「弥生グループに喧嘩を売る事は、国が滅びる事と同意ではないか

……何を考えておるのじゃ……」

「ま、大丈夫よ。余程下手な交渉でもしない限り」

『表に出ろ！！』

『我ら魔法使いの力、思いしらせてやる！』

別室から罵声が聞こえてくるのを聞いてくれアリカが頭を抱える。

私？ 別に何もないわ。しいて言うなら馬鹿だっと思ってただけよ。

「ま、拙いのではないか……奴らは性格こそ悪いがウイスペルタテ
イアでもトップクラスの魔法使いじゃ。こんな事でもしも死んでしまつたら」

「さ、いきましょ」

「ど、どこに行くと言つたのじゃ！？」

「決まってるじゃない。あの、漣に喧嘩を売った愚か者の最後を見に行くのよ」

この様子だと漣も相当お冠の様子だしね……

あの護衛、どんな終焉を迎えるのかしら。

side アテナ end

「さあ、構えろ!!」

「慌てるなよ……ほい、完成」

認識阻害の結界も張らずに俺に杖を向けて挑発してくる護衛ども。

「さ、何時でもいいですよ。先行は譲って差し上げます。どうぞお好きな魔法をお唱えになられて下さい」

「なめおつて……いくぞ!」

「おう!『契約により我に従え(ト・シュンポライオン・ディアコネート)』モイ・バシレク・ウーラニオーノーン高殿の王!」

「『来れ雷精 風の精』!」ウエニアント・スビーラウネーレス・フルグリエンテース

「『来れ(ケノテートス・) 虚空の雷 薙ぎ払え(デ・テメト)』アストラフサト

」

なんだ、全員雷属性で来るんだ。なら

「(魔法の射手・連弾・雷の131313の矢)一点特化」

俺の詠唱で出るのは、魔法の射手13131313発の威力をたつた一発に凝縮した、他からはただの魔法の射手にしか見えないモノ。

だが、忘れるな。この矢には、通常の魔法の射手の13131313倍の魔力がこもっている……!!

「たかが魔法の射手で防げるものか!!『千の雷』!」キーリブル・アストラバー

「我らをなめるなよ……『雷の暴風』」ヨウイス・テンベスター・フルグリエンテース

「粉微塵となるがいい!!『雷の斧』」ディオス・デュゴス

目の前に迫って来る数多の魔法。

確かにそれは強力だ。だが

「……ぬるい」

率直に思ったことと共に、俺は作り出した魔法の射手を放った。

side アテナ

へー、『千の雷』使える術者いるんだ。

中々の実力ね。私達じゃなきゃ負けてるわよ？

「ま、拙いのではないか……？」

「へーきへーき。あ、ポップコーン食べる？美味しいわよ」

「そんなことをしとる場合かー！」

ポップコーンを差し出したら頭を叩かれた。いい突っ込み能力ね。

ウチに欲しい位だわ。『千の雷』といえば雷系の広域殲滅魔法…

…それに、雷の暴風も雷の斧もある……いかに強くても、魔法の射
手程度で防ぎきれぬわけが……」

「ま、それはおいといて、一つイイコトを教えてあげる」

「む？イイコト、とは？」

「ジャック・ラカンって、知ってる？」

「知らないわけが無かるう。先程テレビで『紅き翼』を一人で下し
ていたではないか」

「ああ、じゃあその師匠って誰か知ってる？」

「そんなもの知っているわけがなかるう」

「私達よ」

「……はい？」

アリカがまぬけ面を出す頃には、既に勝負は終わっていたわ。

いや、勝負というのもおこがましいわなね。それは、

圧倒的な力による、蹂躪だったわ。

side アテナ end

side リューク

私は、自分の目が信じられなかった。

あの交渉していた弥生グループの者の有り得ない実力には驚いたが、雷系の最上級魔法を相手に魔法の射手ごときで勝てる訳がないと思っていた。

そう、今までは。

「ば、馬鹿な!!」

「有り得ない……」

「何故、何故だ……」

『雷の斧』がまるで政治家の口約束のように打ち砕かれ、『雷の暴風』も障子のように簡単に貫通し、『千の雷』すらも、まるで、眼中にないばかりに、消えた。

「く、来るな、く……ギャアアアアアアアッ!」

「や、止める、たのギャアアアアアアアアッ!」

そして、直撃するのは弥生グループの者の『魔弾の射手』。

世界は広い、それを感じさせられた一日だった。

side リューク end

はあ、全くもって大変な一日だったよ。

その後アリカ（様をつけなくていいと言われた）と交渉し、護衛の

契約をした。

その時、俺が弥生グループの創設者だと知られた時は、啞然とされた。

まあ、そんなものだろう。

そして今、俺はある人物を『名もなき島』^{ネームレス}に招いている。

その人物とは、

「全く。僕だつて忙しいんだよ？」

「ああ、悪い。じゃ、はじめるか」

アーウェルンクスシリーズが三番、テルティウム。

またの名を

「すまないね、フェイト」

「まあいいよ。じゃ、始めようか」

フェイト・アーウェルンクス。

ここから、全ての運命が変化する。

何故か、そう思った。

第9話 王女殿下との交渉です（後書き）

今回漚が行った事を説明すると……図で説明します。

魔法の射手の攻撃力を1、雷の斧『全体』の攻撃力を250、雷の暴風『全体』の攻撃力を500、千の雷の攻撃力を7000とします。

今回の漚の総合攻撃力は、13131313の魔法の射手（西尾さんネタです。てへ。）を一点に特化させた物なので、威力は分散せずそのまま13131313となります。

が、他の魔法はどうでしょうか。

雷の斧自体の攻撃力は高いのですが、『魔法の射手が着弾した』部分の攻撃力はそこまで高くないと思います。

つまり、『全体』の攻撃力は高くても、その攻撃力は全体に分散しているんで、その一点的な攻撃力（防御力と言ってもいい）が弱いので、簡単に消されたのです。

つまり、

漚 魔法の射手（攻撃力131313）vs 護衛 雷の斧（防御力50）

他の場合も同じです。

簡単な例を出すと、細いドリルで固い鉄板に穴を開ける感じですかね（その例を出せ）

では次回。アーウェルンクスとの対談となりました。早く原作に入りたいぜ。

では、『マトリョシカ』を聞きながら。

第10話 アイウェルンクスとの交渉です（前書き）

タイトル詐欺でなおかつ駄文すぎる……

第10話　アーウェルンクスとの交渉です

「じゃあ、座らせてもらおうよ」

「はい、どうぞ」

フェイトを座らせながら俺も座り、アテナが珈琲を持ってくるのを待つ。

「では、要件を聞きましょうか」

「何、簡単だよ。僕達の要求は一つ。連合と帝国の両勢力への支援一切を止めて欲しいんだ」

「……これはまた、手厳しい所をつきますね」

「そうかな？ 『名無しの皇帝』ネームレス・エンペラー」

「……何ですか、その名前は？」

いきなり聞き慣れない名前が出て来たので驚いてしまう。

しかし一体なんだ？ その厨二病全開の格好いい名前は。

「『弥生グループ』の裏のボスの事だよ。最も、魔法世界の大半は君の名前だと思っているけどね」

「……おかしいな。しっかりと仮の葬式はしたと思ったんだけどな」
忘れもしない三百年前。この島を見つけ出した侵入者を捉えた時に、こいつを変わり身にして俺自身の葬式を行ったのだ。
スケープゴート

理由はいくつがあるけど、最も大きい理由は裏で実権を握るため。下手に表に出過ぎて不老不死だとバレたくないし。

しかもそれは俺の移行で大々的に行ったから、疑う奴はいたとしてもそんなに多くは

「君の会社の戦略が会社を興した時から変わっていないんだよ。しかもそれなのに誰も離反しない。こうなると君が生きていると考えた方が理解しやすいよ」

だからそんなに多いんですね、わかります。

「ああ、それと君がジャック・ラカンの師匠だという事は本当かい

？」

「……どこでそれを？」

「裏でも殆ど知られていない噂だからね。おまけに信憑性も低い。だから誰も信じていない。安心していいよ。後、少し殺気を抑えてくれないかな。流石に苦しいよ」

しまった。どうやらいつの間にか出てたらしい。

慌てて殺気を消すと、フェイト苦笑してくる。

ちょうどその時、アテナが珈琲を入れて持ってきた。

さあ、さっさと終わらせるか。

「で、どうするんだい？」

「意見が平行線になった時、やる事は一つしかないでしょう？」

結局、意見は纏まらず、俺とフェイトは外へと出ていた。

何故かって？決まってるだろ。戦うためだよ。

「ああ。戦う時には、少し本気を出してくれないかな。僕も、君の本気という物を見てみたくてね」

「ほう。人形には意志はないのでは？」

「そうなんだけどね。まあ、僕の個人的な興味のようなものさ」

「まあいい。『来たれ（アデアット）』」

そう頼まれたら断るうにも断り難いので、俺の奥の手を見せる事にする。

そして、来たのは 一対の双剣。銘は 騎士剣『陰』と『陽』。

「さあ構えろ、精神を極限まで尖らせる。そして 一瞬たりとも気を抜くな」

「じゃあ始めるわよ。レディー、ゴー！」

そして、アテナの気の抜けた声と同時に、俺達は動き出す。

「ウ」

「遅い」

一瞬で『自己領域』を発動させ、フェイトの背後に回り込む。回り込むスピードは光速の99パーセント。見切れるはずもなく、フェイトには瞬間移動したように見えるだろう。

それに驚いて一瞬の隙が出来るが、それは甘すぎる……！！

そのまま運動速度を125倍、知覚速度を250倍へと移行。フェイトの動きが250倍遅く見える。

そして、

「じゃあな。決着だ」

障壁を情報解体で破壊し、その勢いでフェイトには何もさせずに数多の斬撃を叩き込む。

そして、一秒にも満たない時間で戦闘は終了した。

side フェイト

ここは……ベッド？

「お、気がついたか」

声のした方を向くと、澪が笑顔で寄ってくる。

どうやら僕は倒されたみたいだね。

「にしてもあの速さはなんだい？異常じゃないか」

「まあ、企業秘密……って言いたいんだけどな、ちよつとだけ教えてやるよ」

そう言つて、澪は後ろを向いてうなじの部分を指し示す。

そこには、何かはわからないほど小さな物がくっついていた。

「見えるだろ？これが、ってわけじゃないがああ速さの秘密だ」

「こんな物がかい？」

馬鹿にしているのか？という目で見ると澪は笑いながら首を振った。
「いやいや、直接的には違うけどな。この剣　騎士剣にも似たようなのが入っていてな、これらは世界を一時的に書き換える（・・・）んだ」

「書き換える？」

「ああ。例えばさっき俺が瞬間移動したろ？」

「ああ。それがどうかしたのかい？」

「今のはな、『自己領域』って言ってな、自分の周囲の空間を『自分にとって都合のいい時間や重力が支配する空間』に改変するんだ。そして亜光速　光速の99パーセントで移動する事が出来る。これはこの剣がなければ出来ないけどな」

「他にも能力はあるのかい？」

「あると思うか？」

澪がにやにやしながら見てくる。間違いない。何かあるんだ。
ただ、僕に教える気はないだけで。

「そろそろ本題に入っていていいか？」

「ああ、いいよ」

こんな話を続けていても益はないからね。

「まず……俺達は、両勢力への支援　という名の輸出を止めない」

「まあ、そうだろうね」

そうじゃなきゃ僕が戦った意味がない。

まあ、意味なんてなくてもいいんだけどね。

「だが、お前達の言うレベルにまでは支援物資のレベルを下げてもいい」

「……どういう意味だい？」

「つまり、ある程度物資の支援を止めてやる、ってことさ。これで十分だろ？」

「……ああ、十分すぎる」

結局、僕の要求と彼らの要求の折中案のような感じになってしまっ

た。

「後、出来うる限り俺はお前達と敵対しないでおいでやる。これが
どいう意味かはわかるよな」

「……肝に命じておくよ」

つまり、敵対しない限りは不干渉だが、敵対したとわかれば全力で
潰す、ということか。

「とりあえずこんなもんだ。あ、珈琲の豆いるか？」

「いただくよ。ここの珈琲はおいしかったからね」

こうして、珈琲豆の個人的な売買契約をして、豆を5キロ貰って僕
は島を後にした。

s i d e フ ェ イ ト e n d

第10話 アーウェルンクスとの交渉です（後書き）

漣のアーティファクトは『無限の武装』であって『陰・陽』ではありません。

しかし、漣のアーティファクトの一部です。

第11話 赤き翼との対決です

そんなこんなで大戦も終わりが続いて、アリカが赤き翼と会う日。

「ようジャック。久し振りだな」

「し、師匠!？」

護衛としてついていた俺も、赤き翼のメンバーと会う事になった。

「で、誰ですか、貴方は。ジャックの師匠だと言っていましたか」

「ただの護衛だよ。気にするな」

最も聡明なアルビレオの問いを軽くスルーする。

まだ俺の名前は世界に知られたくはない。まだ、な。

「ジャック、お前の師匠ってことは強いんだな!? そうなんだな!」
「？」

馬鹿が俺に突っかかってくるが、無詠唱の『雷の暴風』を打ち込んで黙らせる。

「慌てるなよ。今から戦ってやるよ。全員とな」

「……舐めているのか……?」

「舐めてないよ。いや、むしろ丁度いいくらいだろ。かつて、ジャック一人に壊滅させられたお前ら相手ならな」

キレたと思われる詠春が刀に手をかける。

「さ、かかってこい。ここに来るまでに認識障害はかけてある。では 命をかける。あるいは、この身に届くかもしれない!」

当然ジョージボイスです。本当にありがとうございました。

「上等っ!」

ナギを先頭にして赤き翼の集団が襲いかかって来る。

さあ、実力の違いを見せつけてやるよ!!

「いくぜ！！契約に従い」

「遅い。『雷の斧』、凝縮」

ナギがあんちよを見ているうちに、澪は『雷の斧』を凝縮し、普通の斧の状態まで密度を高める。

そして、澪はそれをナギに向かって

「とりあえず倒れとけ。お前の相手は後でしてやる」
投げつける。

有り得ない速度で投げられたそれは、ナギの腹に直撃し爆発する。ただの爆発ではない。『雷の斧』の全ての威力を持った攻撃。当然その威力を受け流す事など出来るわけもなく、ナギはそのまま吹っ飛ばされる。

「ナギ！！」

「余所見などしている場合か？」

「！！！？」

ナギが吹き飛ばされた事で出来る一瞬の隙。

その間に、澪は詠春の間合いへと入っていた。

「チィッ！！神鳴流」

「遅い。斬岩剣」

そして、当然のように入る澪の一撃。

かなりの威力ではあるが、命に別状がないように放ったその一撃は、詠春を簡単に吹き飛ばす。

「……………！！」

「ほう。重力魔法か。」

詠春が倒れた瞬間、アルビレオは重力魔法を発動し澪を縛ろうとする。

が、それがきくのはあくまでも普通の重力に慣れている場合のみ。そう、例えば

「この程度の重力、慣れてるんだよっ!!」

特別な部屋で、100倍の重力に慣れていた場合は、意味などないに等しい。

「残念だったな、アルビレオ。俺は自らの鍛錬用に100倍の重力室を作り、そこで修行してたんだ。その程度の重力なんか、関係がないんだよ」

「な……っ」

「下がっているのじゃ、アル!」

ここで、ようやくゼクトの用意が終わり、漑に狙いをつける。

「いくぞ!『燃える天空』!!」

満をじて彼から放たれるのは、広域範囲殲滅呪文。

明らかに人一人を倒すには破壊力がありすぎる呪文。

その呪文を、漑はまるで興味が無さそうな目で見ていた。

「はあ……やっぱお前らには俺の切り札を見せる価値もない、か」

…『燃える天空・一点特化』」

あからさまに面倒くさそうな漑から放たれたのは、ゼクトと同じ広域範囲殲滅呪文。

が、その範囲がおかしかった。

ゼクトのように広範囲を破壊するのではなく、魔法の射手よりは大きい、雷の暴風よりは小さい、そんな大きさだった。

まるで、範囲が小さい分破壊力を高めているかのように。

「その程度の呪文で、勝てると思うたか!!」

「はあ。だりい……」

あからさまに勝ちを予想しているゼクトと、気怠そうにはしているが警戒を怠ってはいない漑。

そして、二つの大呪文が激突し

ゼクトの燃える天空が、まるで紙か何かであるかのように貫かれた。

side アテナ

「どうアリカ。圧倒的でしょ？」

「そ、そうじゃな……」

アリカはまるで放心状態のようね。
ま、無理もないわ。

自分の護衛が、連合の英雄赤き翼をまるで踏み潰すかのように相手してるんだもの。

けど、私にとってはこれが普通。

いや、こうでなければおかしいわ。

このレベルの魔法を完全に制御出来るようになったのは、あの始めて戦った時から実に25年もの日々を費やしたわ。

それに、会社の運営をしながら私が作ったダイオラマ球の中でひたすら色々な武術を鍛えた。

時にはその場所に自らおもむき、時には自分で一から作り上げ、またある時には必要な物を自らグループの変態共と共に必要な物を開発した。

そして、彼は私を超えた。

……もつとも、今の（・・・）私であって本気の私じゃないんだけどね。

それでも、本気の私とともに戦えるくらいには成長したわ。

そして、いかに強くなったとはいえまだ今の私を超えていないジャック。

さあ、どう足掻くのか、本当に楽しみだわ。

side アテナ end

「さ、残るはジャックと馬鹿だけか」

「だ、誰が馬鹿だ！」

「師匠の言う通りだ」

「お前も工程するなジャック！」

そんな馬鹿げた会話をしつつも漣はジャックに全力で殺気を放つ。

「……………いつ食らってもキツいな、こりや……………」

「まあ、な」

「アデアット」

ジャックは、漣が動く前に自らのアーティファクトを手にする。

それは、異世界の者との契約の証し。

それは、別の世界で『最強』と謳われた騎士が持った剣。

その銘は 『紅蓮』。

「来るなら来い。先手は譲ってやる」

「なら……………行くぜっ!!」

言った瞬間、ジャックは自己領域を起動させた。

第11話 赤き翼との対決です（後書き）

感想は作者の栄養源です！感想は作者のモチベーションを上げます！

さあ、みんなも感想を書こう！！

要約すると感想が欲しいので書いてくださいという意味になります
（笑）

第12話 いろいろと疲れたのです（前書き）

はあ、難産でした。

第12話 いろいろと疲れたのです

ジャックが自己領域を使用し澪の背後をとる。
が、その時既に

「悪いなジャック。読めてる（・・・）んだよ」

澪は、窒素結晶の槍を背後に作り出していた。

「……『氷槍檻』」

そして、ジャックの周りに有り得ない量の槍が出現する。

その数は、軽く見ただけでも万を超え、億に達しようとしていた。

「いけ」

そして、ジャックの周囲360度に隙間なく配置された氷の槍が、いつせいに標的めがけて発射された。

「ちいいいいっ！」

瞬時の判断でジャックは『情報解体』を発動。氷の槍が原子単位で解体され、塵と化す。

しかし、澪は顔色一つ変えず、静かな笑顔でジャックを見ていた。

「……何を企んでいるんだ？師匠」

「そろそろかな」

「何 はっ！？しま」

ジャックは、そこで自らの失敗に気がついた。

情報解体で進んでいるうちに、槍が最も密集する地帯へと誘導されてしまったのだ。

「さあ、耐えろジャック。『炎神』」

「……くそっ、『気合防御』っ！」

澪によって氷の槍に急激に熱気が増えられる。そして、

巨大な、水蒸気爆発を生み出した。

「はあ……はあ……」

「ほう、まだ立っていたかジャック」

「ああ、まあ……」

ジャックはまだ負けてはいないと漣を挑発する。

しかし、それが虚勢であるということは誰がどう見ても明らかだった。

全身は巨大な火傷でただれ、その身体から感じる気も最早ないに等しい。

そして、漣の圧倒的な余裕がそれをさらに圧倒していた。

「よく頑張ったな、ジャック。だが、もう終わりだよ」

「いや、ま」

ジャックが、その場で続きを言うことはなかった。

何故なら、ジャックは

「そんな、嘘だろ……？」

漣によって別次元に幽閉されたからだ。

「さあ、後はお前だけだ。ナギ・スプリングフィールド」

「くそつ、契約に従い」

「遅い」

詠唱の隙を突かれ、懐に入られる。

そして

「『千の雷』威力特化」

ナギの無詠唱の障壁など意にもかえさないかのような、膨大な雷がナギに直撃した。

「というわけで、俺の一人勝ちだな」

戦いから一日。俺の圧倒的な力を見せつけられた赤き翼は、ある一人を除いて静かに療養に徹していた。

「頼む！もう一回だけ戦ってくれ！！」

そう、馬鹿^{ナギ}一人を除いて。

にしてもこいつは本当にバグキャラだな。俺の放った『千の雷』は、普通の『千の雷』の十分の一程度の範囲しか攻撃出来ない代わりに、破壊力は二十倍近くある攻撃だぜ？

なのにそれを食らって約三時間で目を覚まし、翌日にはピンピンしてるって……

「相手ならアテナにしてみらえ。今忙しいんだよ」

「え、あの人今何やってんだ？」

「ああ、今は」

刹那、外で大爆発が巻き起こる。

「し、師匠！！死ぬ！！死ぬから！！」

「黙りなさいジャック さあ、次は『おわるせかい』、いっくわよ
」

「くっそおおっ！！」

「ジャックに修行をつけてるんだ。久し振りだから気合い入ってるだろ？」

「いや、気合いの問題じゃない気がするんだが……」

呆然とする馬鹿を置いて俺は部屋を出た。
……そろそろあの姫さんを助け出すか。

s i d e アスナ

暗い。

暗い。

暗い。

暗くて何もない牢獄。まるで私の心のよう。

別にいい。所詮私はモノだから。姫と呼ばれながら未来永劫出る事は出来ない籠の鳥。

だから、私は

「『情報解体』、つと」

……え……？

「よ、はじめましてだなお姫様」

壁が砂になったような音がしたので、振り向くと、知らない人が笑っていた……。

「……誰……？」

「ああ、俺は」

「何か音がしたぞ……！」

「アスナ様の方だ……！」

「……あー、五月蠅いから一つだけ聞く。アスナ・ヴィスペリーナ・エンテオフュシア、お前はここから出たいか？」

その魅力的な問いに、私は
首を、縦に振った。

「よしっ……！久し振りに全力で」

言った瞬間、男は拳を構えて、

「暴れるかあああつ!!」

その拳を、振り抜いた。

「ぎゃあああああつ!!」

「な、何が起きたのぎゃあああああつ!!」

そして、その余波でぶつ飛んでいく兵士達。

「せっかくだからコソコソ盗まずに、」

そして、次々と襲い来る兵士達。

「堂々と強奪といきますか!!」

そして、澪は手を重ね、

「『百式観音、壱乃掌』ッ!!」

瞬間、何かに殴られたように吹き飛ぶ兵士達。

「な、何が起こつ」

「遅いな……『閃鞘・八点衝』」

「うわあああああつ!!」

そして、驚く兵士達の懐に入って、斬撃を繰り出す男。

その斬撃は、私の目を持ってしても 見えない。

「まだまだいくぜ!!『無限一刀流・乱立の並』!!」

今度は、男は無数の刀を周囲に撒いて浮かせながら突撃する。

その刀の結界に立ち入る事は誰も出来ず、無様に倒れていくだけ。

「……強い……!!」

私は、いつの間にかそう言っていた。

「面倒だからそろそろけりをつけるか よつと」

「っ!!馬鹿な……」

瞬間、私は見てしまった。

一見何もしていなかった男が、指を少し動かただけで、兵士達全員の動きが止められてしまった事を。

「増援が来るなんて思わない方がいいぜ。俺が拘束したのはこの部屋だけじゃない。この建物丸ごとだ」

「……馬鹿な……」

「貴様、何者だ!!」

「そんな物答えるかよ。さて、お姫様。答えは決まったかな？」
そう言つて、差し出される男の手。

私は、その手を

「私を、連れていつて」

「了解した、お姫様」

とることに決めた。

第12話 いろいろと疲れたのです（後書き）

次は、かなり時間が飛びます。

第13話

一気に京都まで飛びます（前書き）

……この作品はどの方向へ突き進んでいるんだろう？

第13話 一気に京都まで飛びます

「はあ。ついに来たな、京都」

「その姿で言っても、説得力ない」

「うっ、痛い所をつくなあ、アスナは」

「事実」

今日は、原作で木乃香が川で溺れた日。

そして、今日を狙って俺達は京都に来ていた。

「にしても、今の漑ちゃん（・・・）は本当に可愛いわね」

「……アテナ、今ここで脱がすぞ？」

「漑に脱がされるなら本望っ！！」

「はあ、少し調教すぎた」

そして、その中でも突出すべき点は、俺が女になっている（……………
・…）ということだろう。

「はあ。いくら麻帆良で生徒をやるためだからって、少しやりすぎ
たか……？」

「にしても似合わないわね、漑が生徒なんて」

「黙ってて貰おうか、『アテナ先生？』」

こう笑顔で言くと、アテナは顔をひきつらせて俺に頭を下げる。

「漑、捻りが足りない」

「お前は俺に何を求めているんだ！？」

「ギャグ」

「一蹴ですか……」

とまあ、一応捕捉しておく、あの後は原作通りに進み、現在赤き
翼はバラバラになり、どこにいるかわからない状態だ。

別に、ジャック以外には会いたくもないけど。特にあの馬鹿とか。

何度潰しても潰しても挑んで来るし……あれか？黒光りするGなの
か？あれは。

ま、そうこうしているうちに関西呪術協会の本拠地についた。当然アポなんてとってないしとる気もない。あるのは

「さあ、行くぜ!!」

ただ、正面突破するという意志だけだ。

「……来たな」

「……何者だ」

歩き始めること五分。恐らくは神鳴流の中堅あたりの剣士が出てきた。

……にしても、本当に弱いな。見るだけでわかる。

「……ただの知り合いだよ。詠春のな」

「……長と知り合いだと?」

「ああ。だが、貴様にとって俺はただの侵入者だ。やることは何も変わらないだろう?」

「……漣、五歳のボディで格好いいこと言っても締まらないわよ」

「……アテナの言うとおり」

五月蠅い! 格好良く締めたかったんだよ!

「……そうだな」

グダグダなのを無理に纏めてくれた剣士。

正直感謝してもしきれない。

「では……参る……っ!!」

「ああ、来いっ!!」

そう言っつて、俺は受けの構えに入った。

side アテナ

あー、始まつちゃった。

にしても、腰にかけてある刀は使わないってことは、『無限一刀流』は使わないのね。

ま、面白いからいいけど。

どうでもいいけど、漣って本当に暇人なのかしら？

『才能を操る程度の能力』は、才能の強弱だけじゃなく、才能を生み出す（・・・）事も出来る能力なんだけど……それに気がついた漣は、本当にひたすら修行を繰り返したのよ。

それこそ朝から晩まで。端から見てたらただの修行オタクよ？

まあ、その無駄な修行のおかげで色々な技を身につけたんだけど。

まあ、それに加えてここ二百年は使っている所を見た所がない『概念を操る程度の能力』に、他の色々な無駄スキルを加えたら、世界最強の人間、いや存在ね。

ま、今はこの戦いを見ますか。三十秒もてばいいんだけど。

side アテナ end

「神鳴流奥義……斬岩剣!!」

先手をとったのは相手の剣士。まともに直撃すれば岩をも砕く一撃

が漑を襲う。

「……忌剣、夜駆け……」

しかし、それはまともに直撃すればの話。

いつの間にか二刀を携えた漑は、一瞬のうちに剣士の剣に自らの剣を直撃させ

パキンッ、と甲高い音。

一瞬の内に自らの後ろにいた剣士が見たものは、半ばから折れている自らの愛剣と

「……馬鹿、な……」

「純粹な実力差だ。諦めな」

クルクルと回りながら、いままさに地面に刺さろうとしている自らの愛剣のなれの果てだった。

「う、うわああああっ!!」

悲鳴をあげながら、隠し持っていた剣を抜き、漑に向かって突きかかる。

「……忌剣、蟲食……」

だが、それも意味などなく。

剣士の剣先にあわせて漑は突き、剣と剣がぶつかり合い、ポロポロと、剣士の剣が崩れ去った。

「……見てるんだろ、盗み見はいけないぜ、詠春」

「ははは、やはり気づかれますか、漑」

「バレバレだ、もう少し気を隠せ」

木陰から出てきたのは、関西呪術協会の長、近衛詠春。

「というわけで遊びに来た兼しばらく厄介になる。よろしくな」

「アポなしでどうしてそこまで剛毅になれるのかわかりませんが…

…一応歓迎はしましょう。ようこそ、関西呪術協会へ」

こうして世界は回りだす。いくつかのイレギュラーを抱えながら。

第11話 神鳴流との対決です（前書き）

迷走してるなあ……

麻帆良に入ったら改定します。

第11話 神鳴流との対決です

「……おい詠春」

「どうしたのですか澪？」

「これは一体なんなんだ？」

あの後、詠春に案内され、俺達は関西呪術協会の総本山へと案内された。

それはいいのだが問題は明らかに歓迎ムードじゃないということだ。

「……なんでこんなに殺気立ってるんだ？」

「貴方の現在の外見が問題ではないのでしょうか？」

「……ああ、確かに」

今の外見　　五才の少女に、神鳴流の剣士が倒されたというのが氣にくわないのか。

ああ　　本当に。

「ちっちええな」

「何だと？」

「ちっちええな、って言ったんだよ」

俺の言葉にさらに殺気立つ大人達（小僧共）。

中には剣を抜いている者すらいる。

「……小娘、調子にのるのもいい加減にしておいた方がいいぞ？あの程度の若造一人倒した所で、神鳴流の全てが知ったと思うなよ」

「ああ。大丈夫。ここの全員がいつせいかかってきた所で、俺には掠り傷一つつけられないから」

「……言っただな、小娘？」

「ああ。さあ、命をかける。あるいは、この身に届くかもしれん
……」

「ほざくな小娘　　……」

刀を抜き、いつせいに襲いかかってくる剣士達。

「無駄な事を……」

Side
アテナ

そう言つて、澪は最初の一人を劔を振る隙すら与えずに斬り、二人目の振り下ろした劔も刹那の見切りで横に一步動くだけで避け、袈裟懸けに斬る。

「はあ。一人も殺さないのね」

アスナの言う通りよ。

「ま、こんな馬鹿だから惚れたのかもしれないわね」

全くもって本当に馬鹿だ。『おわるせかい』や『千の雷』のような
広域範囲殲滅魔法を使えば簡単に勝てるのに。
それをしない理由は

澪が剣や魔法を覚えた本当の理由もそれ。澪は、ただ戦いを楽しんでいるだけだ。

本当に気に入らない相手や、正義正義五月蠅い魔法使いどもは容赦なく殺しているけど、そうでない相手や実力差を見せつけたい時、それに 今回のように殺したら将来的に損する時はただの一人も殺さない。

「全く、本当に 馬鹿なんだから」

side アテナ end

「馬鹿な……」

「そんな……」

「「嘘だああああっ！！」」

神鳴流の上位陣は、ただ目の前の光景を見て否定しか出来なくなっていた。

何故なら

「ふう。で、もうお仕舞いか？」

中堅クラス百人が、五歳の少女たった一人にかすり傷一つ負わせる事が出来ずに倒れふしていたから。

「……私が、いこう」

ここで、事態をずっと見守っていた一人の青年が二刀を携え、立ち上がった。

「し、師範代！！」

「いけません！私達が行きますので、師範代は座っていて下さい！」
周りの制止を気にかけることもせず、また口を開くこともなく師範

代と呼ばれた男は少女　　漣の前へと歩いていく。

そして　　剣を正眼に構え、彼は再び口を開いた。

「神鳴流、師範代　青山斬月。名を聞こう、強き者よ」

「　　《名無しの皇帝》^{ネームレス・エンペラー}、弥生漣。」

「弥生漣、か覚えた。では……」

「行くぞ……」

言うが早いか同時に二人は互いの首を狙いに突撃する。

いつの間にか二刀へと変わっていた漣を不信に思いながらも、斬月は容赦なく奥義を繰り出す。

「神鳴流決戦奥義、真・雷光剣」

言うと同時に電気エネルギーが爆発し、膨大な光が放たれる。

その隙に斬月は漣の後ろに回り込み、再びの奥義を放とうとしていた。

「神鳴流奥義、斬鉄閃……」

斬月にとって、新・雷光剣はめくらましにすぎず、本命はこの斬鉄閃だった。

鉄すら斬る斬鉄閃。それは、例え刀であっても変わりはない。

その光景を見て、斬月の勝ちだ、と二人を除いて場の全員が思った。
が。

「神鳴流奥義、斬鉄閃」

ギイイイイイン……

甲高い音が鳴り響き、剣と剣が拮抗する。

「そんな、斬鉄閃が……」

とは誰の声か。

「何故、お主は斬鉄閃が使えるのだ？」

「詠春の見よう見まねだ。流石に師範代クラスととともに戦える程の力はないさ」

漣の言う通り、徐々に漣の刀が押され始める。

が、漣は斬月の剣を全力で弾き上げ、瞬動を使い、斬月の間合いから退避していた。

「今度はこっちの番だ　草壁の宝刀の力、存分に味わえ」
言つと同時に澪から放たれた有り得ない程の気の量に、斬月は

「ああ、来るがいい、弥生澪！！」

歓喜していた。

「忌剣　斬月！！！」

澪から放たれたのは、高威力の衝撃波。

「神鳴流奥義、斬空閃」

だが、斬月も避けることはせず、同様の技をぶつけて相殺する。

衝撃波と衝撃波がぶつかりあい、爆発を生み出す。

刹那、自らの目の前に剣を交差させながら姿を表した澪を見て、斬月は驚きを隠せなかった。

（まさか……私の行動を、読んでいたのか！？）

斬月は相手の狙いに気づき、今度こそ驚きを隠せなかった。

（今の技を撃つたのは、私に斬空閃を撃たせて爆発させ、それに紛れて私に近づくためだったとも言うのか……！！）

自らの短絡的な行動に失敗を感じる斬月だが、それでもなお反射的に防御の姿勢をとる。

「忌剣　友切」

技が放たれた瞬間、斬月は自らの持つ刀が急に軽くなったのを感じた。

「くっ……」

自らの愛刀が折れた事を驚愕しながらも認めた斬月は、それを漣に向かつて投げつけた。

キンッ！！

「うおおおおっ！！」

漣が刀を弾いた事で出来た隙。その隙の間に、斬月に向かつて走る。

「忌剣」

あえて隙をさらした（……………）漣も、斬月の行動を見て笑みを浮かべ、斬月へと向かつて駆ける。

「神鳴流奥義、五月雨斬り！！」

「夜駆け」

両方の刀がぶつかり、かん高い金属音が鳴り響き

「俺の、勝ちだ」

「ああ。そして、私の敗北か」折れた刀を右手で持ちながらも、漣は折れていない刀を左手で斬月へと突きつけていた。

「京都神鳴流の看板、持つて行くがいい」

「……いや、俺は道場破りじゃないぞ？」

「……は？」

斬月だけではなく、気絶していたはずの剣士達までもが啞然とした表情で漣を見た。

「……神鳴流の看板を奪いに来たわけではないというのか？」

「ああ。あれは帯刀していたから勘違いして襲いかからただけだ」

「では、何の為にここに来た？」

「ちよつと家を借りに、な」

笑顔で言う澪を見て、アスナとアテナを除く全員がわけのわからな
いような表情を浮かべた。

第12話 関西呪術協会との交渉です。

「……今日も、平和だな」

「どうしたんだ遷、そんなじくさい事を言つて。まだお前は若いんだから」

「俺の本当の姿を知つてその言葉を言つてるんだろ？」

「すまない」

全く、それならそうで言わなければいいものを。

現在、俺は斬月の家でお茶をご馳走になっている。斬月の煎れる抹茶がとんでもなく美味しいのでつい飲んでしまう。凄いな。これがお茶の魔力か。

「それにしても、驚いたぞ。お前が私達に手を貸すと言つた時は。

てつきり私はお前は関東に手を貸しているのかと思つてしまったではないか」

「……だから、あれについてはちゃんと説明しただろ？」

「ああ、そうだな」

話は、俺が斬月を倒した時にまで遡る。

「家を貸せ、だと……？」

「ああ。正確には弥生遷が関西に居を構えた（……………
・・）という事実が欲しいんだよ」

「わけがわからぬ……そもそも貴様は何者なんだ!？」

俺が何者、ねえ……さっきちゃんと名乗ったじゃないか。まあ、今

の外見ではわからないのも仕方ない、か。

幼女だし。

妖女だし。

「彼女……いや彼は本物の『名無しの皇帝』ネームレス・エンペラーですよ」

お、さすが詠春。こういう時のフォロー能力は天下一品だな。

「『名無しの皇帝』だ……？」ネームレス・エンペラー

「それが本当だとして魔法世界の英雄がこんな所に何をっ!!」

うわ、さらに殺気立った。ああ。本当に準備は大切だね。

「か、身体が!？」

「なぜ動かぬのだ!？」

「全員動かない事をお薦めする。動いたら命の保証は出来ない」

斬月を倒した後にさっさと曲弦系で縛っておいて、本当に良かったよ。

ちなみに今回は殺す気はないので一姫ちゃんみたいな曲弦系じゃなくて有馬さんみたいな曲弦系だ。さすが本家ジグザグの技術。練習しておいて良かった。

「遷、本来の姿に戻れますか？」

「ああ。別にいつでも戻れるけど」

「では戻って貰えませんか？そうでないと誤解も解きにくいですし」

「そうだな……結構気にいってるんだけどな、この姿」

そう言っつて、俺は元の姿に戻りにかかる。

『概念変更、女性を男性に、五歳を二十歳に』

今の俺の姿は、『もし俺が五歳の女の子だったら』を体現した姿だ。

概念を操れるということは、即ちこの世界の全ての変更権を持つという事だ。それは、性別、年齢、寿命すらその範囲に収まる。

そして、俺の姿が光に包まれる、なんていう事はなく、徐々に元の姿に変化していった。

「ふう。久しぶりね、その姿」

「あい変わらず……格好いい」

おうおう、嬉しい事を言ってくれるなお前ら。後でご褒美をやろう。

「……少し気を静めて貰えませんか、漑。このままでは流石の私でも息苦しい」

「おいおい、鈍ったんじゃないか詠春？そんなんじゃないアスナにすら負けるぞ」

「はは。これは手厳しい」

手厳しくなんかない。むしろ適切な評価だよ。

今のアスナの力は、ラカン強さ表でいえば普通に10000級の強さはある。今の詠春では瞬殺されるのがオチじゃないか？

「……名無しの（ネームレス）……エンペラー皇帝……」

「ほ、本物だったのか……」

いや、さっきちゃんと名乗ったじゃん。やっぱり老人共は老化でボケるのが早いんかね？

ま、いいや。とりあえず今は挨拶をしろ。そっちの方がはるかに効率がいいし。

「気づいている方も多いだろうが、一応挨拶しておこう。弥生グループ名誉会長、弥生漑だ。今回関西呪術協会に寄らせていただいたのは、貴方達とある取引をしたかったからだ」

「……取引、じゃと？」

「ああ。貴方達にとって、かなり益のある話だと思う。単刀直入に聞こう。貴方達は、関東魔法協会をこの日の本から取り除きたくはないか？」

「……なんだと？」

さあ、交渉の始まりだ。

始まったわね。交渉が。

「どういうことじゃ!？」

「確かに願ったり叶ったりじゃが……どうして弥生グループがそんな話をもちかけて来る？」

「おーおー、荒れてるわねー。ま、そうじゃ無ければおかしいんだと思うけど。」

「なんせ私達は招かれざる客だ。そんな私達から益になる話を持ちかけられた所で、とうてい信じられないんでしょうね。」

「じゃあ、まずは色々な情報を見ていただくと思いますか。 エコ

「……」

「どうしましたか、澪様。」

「あれを」

「かしこまりました。」

「やっぱり連れてきてたのね。ま、いい子だから別にいいんだけど。」

「エコー。名字は無く、私達はただエコーと呼んでいる女の子。」

「昔、澪がどこから拾ってきた女の子で、現在は弥生グループの澪付きの秘書をやってもらっている、無表情で無感情なんだけど、たまに感情を表した時が可愛すぎる、そんな子。」

「でもとにかく有能なのよね、この子。今も、どこから取り出した資料をばらまいているし。」

「見て貰っている資料は、全て裏がとれている真実です。エコー、ありがと」

「いえ。仕事ですから。」

「そう言つて、後ろに下がるエコー。いや、本当に従者の鏡ね。」

「もしも私に協力していただけると言うのであれば、先の対戦で魔法使い共が支払っていない賠償金を全額お支払いしましょう。それだけではなく、これも貸して差し上げます」

「これ……?」

「呪術協会の者達が澪が放り投げた資料を見た瞬間凍りつく。」

「ま、仕方ないか。なんせ、あれは」

「……いかがでしょうか」
「ここまでされたら乗るしかないだろう」
「全くだ」

麻帆良学園の総面積の約一割、その権利書なのだから。

「……一つだけ教えてくれ、漣」

「どうしたのですか、斬月殿？」

「お前は何故、そこまで関東魔法協会を潰したいのか？」

まあ、斬月が疑問に思うのも最もね。

招かれざる客が入ってきたと思っただけ自分達神鳴流の剣士の悉くを倒し、その上で自分達に都合が良いすぎる契約を持ちかけてくる。

普通に考えると罠としか思えないもの。

「何か勘違いしてませんか、斬月殿？」

でもね、斬月。

漣は、貴方の予想の何倍も馬鹿よ。

side アテナ end

「私の最終的な目的は、関東魔法協会が本国と呼んでいる、メガロメセンブリアです」

「な……っ！！しかし何故」

「気にいらなからですよ」

「気にいらない？」

「ええ」

当たり前だ。あんな糞共を誰が好きになるっていうんだよ。

「自分達を正義だと言い、自分達に逆らう全てを悪と称する、救いのない屑で糞でロクデナシ。それがメガロメセンブリア元老院です。私の知ってる内にほんの一人だけまともな考え方をする者がいますが、それ以外は生ゴミ、いや生ゴミにすら劣る産業廃棄物の塊です。生ゴミはまだ家畜のエサになりますからね。そして正義という気持ちのいい言葉で操られ、メガロメセンブリアの言う通りに働く人形、それが正義の、いやここではこう言い換えましょうか。屑で能無しで恥知らずな魔法使いの正体です。私は、そんな屑が嫌いで嫌いで仕方が有りません。正義の為、誰かの為という言葉で自分を誤魔化し、紛争地帯に介入して自分は安全な位置からミサイルのような魔法を使って虐殺する。そんな魔法使いですが、治癒魔法を使える者が殆どいないんですよ？本当に屑ですよ。本当に人の為に働きたいのなら、治癒魔法で人々を救うのが筋だというのに。筋違いにま程があります」

「そ、そうか」

斬月が若干引いているが、まだ俺のバトルフェイズは終了していないっ！！

「そんな屑共は日本を侵略しにやってきて、その本部が関東魔法協会です。貴方達は被害者。どちらに手を貸すかは一目瞭然でしょう？」

「だが、本当にいいのか？」

「くだい。さあ、俺と組んで共に関東魔法協会を潰すのか、このまま何も出来ずに潰されるか。好きな方を選ぶ」

やっべ、交渉用の仮面が完全に剥がれてしまった。
ま、もう十分だろ。

「私は賛成だ」

「私もだ。このまま潰されるのなら、共に戦ってみたい」
話は決まったも同然だし、な。

第12話 関西呪術協会との交渉です。（後書き）

エコー

パンドラハーツのキャラクター。無口ツンデレ。

作者はツンデレが大好きです。

何故澪が家を欲しがったか。それは、次の話で書けるかと。

いつ更新出来るかは未定ですが（笑）

第13話 斬月のデート大作戦です（前）（前書き）

思いつきで初めてしまった。

後悔も反省もしていない。

第13話 斬月のデート大作戦です（前）

「……弥生、澪殿」

「どうした」

「貴殿の申し出、受けよう」

「そうか」

あれから三時間後。返ってきたのは予想通りの答えだった。

「……斬月、お茶」

「お、ありがとな木乃葉」

「……別に、貴方の為に持ってきたわけじゃない。こちらの、お客様の為に持ってきただけ」

「それでも、だよ。ありがとな、木乃葉」

「……っ!!」

あ、ありのまま起こった事を話すぜ!!

なんかお茶を持ってきた女の子がツンデレな台詞を言ったと思ったら斬月が滅茶苦茶キザな台詞を吐いてそれを聞いた女の子が顔を真っ赤にして逃げ出したんだ……。

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……

「……はあ。俺、嫌われてるのかなあ」

「いや、それだけはない」

「顔を見られただけで逃げられたんだぞ？嫌われてるとしか思えな

いではないか」

そう言つて、肩を竦める斬月。
もしかして、こいつ

「……気づいて、ないのか？」

「む？何にだ？」

はい、ただの鈍感です本当にありがとうございました。

しかし、現実でここまで鈍感な奴、始めてみた。

今までにも鈍感な奴は見てきたが、ここまで来るとな……

大方、今まで剣一筋で、女の子と話したことも殆ど無かつたんだろ
う。

全く、仕方がない……

「エコー」

「なんでしよう、澪様。」

「こいつらをくつつける。さっきお茶を持ってきた女の子の所に言
つて話を聞いてきてくれないか？」

「はい。全ては 澪様の、思うがままに。」

「いつもありがとね、エコちゃん」

「エコーですっ！！」

怒つたような表情で訂正した後、走っていくエコー。

いつも頼つてしまつて本当に申し訳なく思いつつも、感謝の気持ち
を禁じ得ない。

後でなんかご褒美あげるね。

「さて、俺も動くか」

一杯の上手い茶の礼だ。少し、動くとしますか。

side エコー

澪様に頼まれたので、私は先程の女の子を探している所です。全く、なんて面倒な。後で何かご褒美を頂くことにしましょう。

「……つと、ようやく見つけました。」

「……誰？」

そう言つて、肩を背ける女性。成る程、確かに美人ですね。

透き通るような黒い長髪に、無垢そうな表情。十人中九人が振り向くような美貌に、なかなかいいスタイル。

まあ、今は関係のない事ですな。

「こんにちは。」

「……こ、こんにちは」

どうやら私に脅えているようです。どうやら失敗してしまいましたか。

「澪様の命令で貴方の愚痴を聞きに来ました。」

「……愚痴……？」

「要するに、鈍感な思い人の文句や普段の文句を聞きに来たという事です。ていのいい便利屋とでも思い下さい。」

事実ですよ？話というのは愚痴の事だと思いますし。

「……いいの？聞き苦しくなると思っけど」

「それが澪様の命令ならば、私は従うのみですから。」

最後の言葉を肯定と受け取ったのか、前の方は話し始めました。

side エコー end

「彼女の名前は、近衛木乃葉といって、私の幼なじみだ」

その後、斬月に彼女のことを聞いたなら軽くスルーされたので頭に来て酒を飲ませて酔わせ、無理やり話させている。

ちなみに飲ませた酒は原酒の『大黒正宗』、アルコール度数が18〜19度程度ね日本酒だ。

「彼女が私の事を避け始めたのは中学生位の時で、私が彼女を意識し始めた時だ」

「……っってお前、あの子の事が好きなのか!？」

「当たり前だろう。好きでもない奴ならあそこまで落ち込んだりしない」

新事実発覚。ってかそれなら気づいてやれよ。あの子もお前の事好きだぞ？

「……ったく、しょうがないな」

「む?どうしたんだ澪?」

「一杯の上手い茶の礼だ。おせっかいかもしれないがお前達をくっつけてやるよ」

「……で、出来るのか!？」

「ま、こういうのは得意だしな」

社長業をやっていると腹が見えない相手と話す事が必然的に多くなるからな、必然的に口は立つようになった。

「いいか?明日、あの子をデートに誘え。俺が上手いことエスコートしてやるから」

「む、しかし……」

「いいって、遠慮するなよ」

むしろ、遠慮されたらこっちが困る。主に面白さという点において

「む、では……お願いしよう」

そう言っつて、斬月は俺に頭を下げて頼んできた。

「ああ。俺に任せておけ」

そう言っつて、俺は明日どうやって彼らをくっつけようか考え始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8607t/>

ネギま！ チートと女神の世界崩壊

2011年9月18日21時21分発行